



TITLE:

# 明代の勲臣に関する一考察

AUTHOR(S):

谷, 光隆

---

CITATION:

谷, 光隆. 明代の勲臣に関する一考察. 東洋史研究 1971, 29(4): 362-409

ISSUE DATE:

1971-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/152826>

RIGHT:

## 明代の勲臣に關する一考察

谷 光 隆

は し が き

かつては他の時代に比べてとくに「貧困」といわれた明代史の研究も、軌近はその面目を一新し、ことに社會經濟史や思想史の面においては、その發展に著しいものがある。明末清初に劃時代的意義を求めようとする見解も、主としてこの方面から起こったものであった。これに比べると、政治史ないし制度史の方面からの考察は、まだ割合にその成果が少ないように思われる。しかし社會經濟史や思想史も、所詮、政治史や制度史とまったく無關係に展開しているのではなく、それらはみな有機的な關連をもつて把握さるべきものであること言を俟たない。一方、宋代以來の特色として強調されている君主獨裁制——ことに文官優位の原則に立つところの——も、元朝や清朝のような異民族の征服王朝においてはもちろん、明朝のような純中國系の王朝にあつても、やはりその時代に制約されて獨特の様相を呈し、しかもそれはまた時間の経過とともに變容するのである。文官と武官との地位權限に關する問題も、そうした歴史的環境の中において始めてよく理解し得るものとなろう。

本稿の執筆は、もともと明代史の基本文獻數種について兵制に關する記述を手抄した際、とくに京營の項において、勲臣（公侯伯）と内臣に係わる事柄に注意を牽かれたことに起因する。たとえば明史卷八九、兵志、京營の條に、

大率京軍積弱。由於占役買閒。其弊實起於統袴之營帥監視之中官。竟以亡國云。

とある記事などがそれで、統袴とは「白い練りぎぬのはかま」すなわち貴族子弟の服であるが、轉じて貴族の子弟そのものをも指し、一種輕蔑の意を含んだ語となっている。それは別に勳臣に限って適用される言葉ではないが、右の場合には、主として勳臣を指しているものと解して差支えない。このあたりの趣意から考察の對象を勳臣に移し、まず明史の功臣世表について検討を加えることにした。明史の功臣世表は、歷代功臣（勳臣）の始封とその子孫の襲封を系圖風に記載し、その間、主要人物についてはその職歴を略記したものである。ところで、この表は卷一〇五・一〇六・一〇七の三卷にわたり、小紙面を幾枚も積み重ねて作られているので、一覽して大勢を把握するというわけにはいかない。そこでこれを疊二枚大の紙面に改作し、とくにその職掌に注意して検討を加えたところ、嘉靖二十九年における京營の改革が、勳臣の地位權限に重大な影響を與えているというイメージが浮かんできた。よってこの點を意識しつつ、更めて個々の勳臣についてその職歴をカードに書き取り、これを操作分析することによって、別記のような數種の勳臣職官表を作成することができた。本稿はこれらの諸表に解釋を加えることから始めて、嘉靖二十九年における前記の問題點を考察し、ひいて明朝軍事體制の來歴と展開に言及したものであるが、それが兵制改革の側面より見て、明末清初の時代を理解する一關鑰となり得れば幸いである。

## 一 明史功臣世表の分析

### (一) 公侯伯の人數と職種

明代の社會で最上層に位するものは、皇族と王族であるが、之について貴族ともいふべきものに公侯伯があり、功臣と外戚が封ぜられた。功臣は一に勳臣ともいわれるので、兩者を併稱して勳戚という。功臣は特別の軍功を立てたものに賜

わゆる稱號であり、通常は武臣がその對象となるが、稀に文臣の場合もないではない。その歳祿は公は五千石から二千五百石まで、侯は千五百石から千石まで、伯は千石から七百石まで、功の大小によって差等がある。功臣・外戚いずれの場合にも爵には流爵と世襲との區別があるが、功臣の場合は多く世襲であった。なお、外戚のほか嬖倖・技藝、宦官の子弟などで特恩により封爵を受けるものがあり之を恩澤侯といったので、明史には功臣世表につづけて外戚恩澤侯表を載せている。その中、外戚の彭城伯・會昌伯・惠安伯の三家は若干軍事に關與しているので併せ參考し、以下、主として功臣世表の内容について検討を加えることとする。

まず、(一)公侯伯に始封せられたものの人数、(二)始封者と襲封者を合わせた人数、(三)とくに考察の對象となる職官を有するものの人数、を調べ之を時代に繋げて表示すると次のようになる。<sup>①</sup>

(三)	(二)	(一)	
31	171	64	洪武
0	3	2	建文
116	351	60	永樂
11	20	4	洪熙
6	22	13	宣德
23	45	18	正統
14	37	10	景泰
28	73	16	天順
14	33	10	成化
0	1	1	弘治
2	5	4	正徳
0	5	2	嘉靖
1	3	1	萬曆
0	3	3	崇禎
246	772	208	計

すなわち、(一)の總數は二百八名、(二)の總數は七百七十二名、(三)の總數は二百四十六名である。但し外戚の中にも考察の對象となる職官を有するものが九名あるので、これを合わせると總數は二百五十五名となる。一見して明瞭なことは、始封者の數が洪武・永樂の二代に多いことで、これはもちろん開國の功臣および靖難の功臣が爵に封ぜられたからである。洪熙以後になるとその數が少なく、ことに弘治以後では極めて稀となる。これは明一代の武功の大勢を示すものであらう。

なお、本表中には現われていないが、爵位の區別は洪武においては公十一名、侯四十九名、伯四名、永樂においては公六名、侯二十四名、伯三十名で、公侯の数は合わせて九十名と多い。しかし洪熙以後崇禎に至る間では公一名、侯十一名、伯七十名で、伯の数が壓倒的に多くなる。また洪武・永樂の始封者数はほぼ同数であるが、襲封者の数には著しい差異がある。これは洪武の功臣が多く胡藍の獄に坐して爵位を削られたためで、明朝功臣の中核をなすものは、永樂の功臣の子孫であるといえよう。

次に考察の対象となった職官であるが、明史功臣世表の前文には、

奕葉貂蟬。保守祿位。典宿衛。領京營。鎮陪京。督漕運。寄隆方岳。階晉公孤。家分典瑞之榮。朝無酎金之罰。

と記している。ちなみに同様の記述を他書に索めると、今言類編卷三、建官門功封の條には、

其才而賢也。充團營三營提督總兵坐營官・五府掌印僉書・留都守備。出充總兵官鎮守。否食其祿。

とあり、國朝典彙卷三一、勳臣考に之を引いているが、また弇山堂別集卷三七、公侯伯表總敘には、

凡公侯伯之任。入則掌參五府總六軍。出則領將軍印爲大帥督。留都完鑰。轄漕綱。獨不得預九卿事。大抵視漢以下。獨

隆崇云。

とあり、春明夢餘錄卷三〇、五軍都督府の條に之を引いている。これらの記述を綜合してみると要するに、五軍都督府の掌印・僉書官、團營あるいは三大營の提督・坐營官、宮廷の侍衛、南京の守備、鎮守總兵、提督漕運などが主要な職官ということになるが、功臣世表中に見える職官もほぼこの範圍を出でないものである。ただ念のためここで本表の作製された典據について一言しておきたい。前文によれば、それは實錄中において襲替歲月の記載あるものによったということである。且つ不正確、不明瞭なものは省略にしたがったと斷わっているのであるが、實際、本表中の記載はかなり簡略粗漏なものである。たとえば、成化前後およそ三十餘年にわたって、三千營・神機營・十二團營を提督し、明朝屈指の勳臣と目される保國公朱永についても、本表中においてはただ「弘治二年三月掌後府」とあるのみでいささか腑に落ちない。故に

この功臣世表によって作製した以下の職官表も、細部に立ち入れればいろいろ問題もあらうが、さしづめ明朝一代における勲臣の動向を大勢として察知するには差支えないであらう。

## (二) 鎮守總兵官・提督漕運

さて、まず鎮守總兵官・提督漕運の職官表を示せば左のとおりである。(一)内は始封年代

### 鎮守總兵官表

洪武二五	鎮雲南	西平侯沐春(洪武)	九	鎮宣府	武定侯郭玪(洪武)
文帝卽位	守大同	江陰侯吳高(洪武)	一一	鎮廣東	安鄉伯張安(永樂)
永樂六以征安南功進封公	世鎮雲南	黔國公沐晟(洪武)	一四	守大同	廣寧伯劉安(永樂)
宣德	鎮甘肅	崇信伯費瓚(宣德)	四	鎮臨清	平江伯陳豫(永樂)
二	鎮永平	遂安伯陳英(永樂)	五	鎮廣西	安遠侯柳溥(永樂)
二	鎮西寧	會寧伯李英(宣德)	五	鎮金齒	南寧伯毛勝(景泰)
一〇	鎮寧夏	寧陽侯陳懋(永樂)	一	鎮甘肅	西寧侯宋誠(永樂)
正統	鎮大同	豐城侯李賢(永樂)	一	鎮陝西	保定伯梁瑤(洪熙)
三	鎮廣西	安遠侯柳溥(永樂)	五	鎮遼東	成山伯王琮(永樂)
三	鎮涼州	會川伯趙安(正統)	六	鎮陝西	同右
四	鎮大同	武進伯朱冕(永樂)	六	鎮廣西	泰寧侯陳涇(永樂)

天順末	鎮蘆州	修武伯沈煜(正統)	一八	鎮湖廣	定西侯蔣驥(正統)
成化一襲	移鎮寧夏	同右		移鎮遼東	同右
成化一襲	鎮陝西	東寧伯焦壽(天順)	正德初	鎮兩廣	安遠侯柳文(永樂)
二	鎮陝西	寧遠伯任壽(正統)		移鎮湖廣	同右
二	鎮寧夏	廣義伯吳琮(洪熙)	三	鎮兩廣	武定侯郭勛(洪武)
二	鎮貴州	南寧伯毛榮(景泰)	四	鎮貴州	南和伯方壽祥(景泰)
五	鎮兩廣	同右	五	鎮兩廣	東寧伯焦淇(天順)
六	鎮兩廣	平江伯陳銳(永樂)	一二	鎮兩廣	撫寧侯朱麒(正統)
七	總漕運	泰寧侯陳涇(永樂)	一六	鎮湖廣	鎮遠侯顧仕隆(永樂)
八	鎮淮揚	平江伯陳銳(永樂)	世宗即位	鎮湖廣	伏羌伯毛銳(成化)
八	鎮兩廣	平鄉伯陳政(正統)	嘉靖四	鎮湖廣	清平侯吳傑(洪熙)
末	鎮兩廣	安遠侯柳景(永樂)	六	鎮兩廣	豐城侯李旻(永樂)
弘治一	鎮寧夏	泰寧侯陳桓(永樂)	一二	鎮湖廣	伏羌伯毛江(成化)
一	鎮湖廣	伏羌伯毛銳(成化)	一二	鎮湖廣	撫寧侯朱麒(正統)
二	鎮兩廣	同右	一六	鎮寧夏	威寧侯仇鸞(正德)
二	鎮湖廣	鎮遠侯顧溥(永樂)	一七	總督漕運	鎮遠侯顧寶(永樂)
弘治三襲	鎮陝西	武安侯鄭英(永樂)	一八	鎮湖廣	臨淮侯李庭竹(洪武)
耀武三襲	鎮貴州	豐潤伯曹愷(天順)	二一	鎮湖廣	豐城侯李熙(永樂)
弘治三襲	鎮貴州	東寧伯焦俊(天順)	二二	鎮兩廣	平江伯陳圭(永樂)
二	鎮陝西	惠安伯張偉(外戚)	二三	鎮甘肅	威寧侯仇鸞(正德)

## 提督漕運表

二九	鎮兩廣	鎮遠侯顧寶(永樂)	隆慶四	鎮淮安	平江伯陳王謨(永樂)
三四	鎮兩廣	靖遠伯王瑾(正統)	萬曆一	鎮湖廣	懷寧侯孫世忠(天順)
三九	鎮兩廣	平江伯陳王謨(永樂)	一四	鎮湖廣	武靖伯趙光遠(成化)
四二	鎮兩廣	恭順侯吳繼爵(永樂)	二九	鎮遼東	寧遠伯李成梁(萬曆)
四四	鎮湖廣	隆平侯張桐(永樂)	崇禎七	鎮甘肅	安遠侯柳紹宗(永樂)

成化七	鎮淮安	泰寧侯陳涇(永樂)	一七	鎮淮安	鎮遠侯顧寶(永樂)
正德四	提督漕運	伏羌伯毛銳(成化)	隆慶間	協守南京	靈璧侯湯世隆(洪武)
嘉靖一三襲	軍典南京	伏羌伯毛漢(成化)	萬曆二〇	領後府改京	新建伯王承勳(正德)
	操軍漕運			提督漕運	

右の鎮守總兵官表でただちに看取されることは、だいたい、天順の頃までは北邊一帯の鎮守總兵官となる例が決して珍しくないが、成化以來ことに正德以後になると、間々そうした例はあるにしてもむしろ例外で、兩廣・湖廣や淮安の總兵となる例が普通となっていることである。すなわち成化五年以後の四十四例中、兩廣は十五例、湖廣は十四例で、兩者を合わせると實に二十九例の多數にのぼる。但し嘉靖四十五年以後においては兩廣の例が見えていないが、これは後述する點と關係があり、また注意すべきところである。春明夢餘錄卷三〇、五軍都督府の條には右の趨勢を指摘して、凡要害之地。設官統兵鎮戍。：曰總兵。曰副總兵。曰參將。曰遊擊將軍。俱於公侯伯・都督・指揮等官內推舉。後不然矣。

といい、また、



明初勳臣。俱充參遊。後止充兩廣・湖廣・漕運三總兵。又次第革而惟戎政五府屬焉。

といっている。すなわち明初においては、勳臣が邊鎮の總兵となることはもちろん、時としては參將や遊擊にまでも任せられることがあったが、後にはただ兩廣・湖廣・漕運（鎮守淮安總兵官がこの任に當たる）の三總兵に充てられることが多く、それも年代の降るにしたがい、しだいにその例が少なくなったというのである。このように明代中期以後、とくに兩廣・湖廣の總兵の地位に勳臣が就くようになったのは、恐らくその管轄區域が軍事的に一應重要地帯でありながらも、しかもまた北邊に比すれば一種の安全地帯で、概して無能者の多い勳臣には、恰好なポストであったためであろう。ところで、明代中期以後、勳臣の總兵が兩廣・湖廣の鎮守の地位に集中する傾向と相關連して、この頃、流官の都督を鎮守總兵官に就けようとする動きが窺われることは無視できない。たとえば正徳八年、給事中傅鏞の備邊事宜の上奏中に、

一、選擇總兵。不必侯伯。凡都督以下。素有威名。未曾委任。或在下僚及註誤閒住者。宜疏名簡用。（詔是之）

とあり、萬曆會典卷一一九、兵部、銓選、推舉の條に、

嘉靖八年令。五府掌印并兩廣・湖廣等處總兵官缺。除提督團營將官不推外。其餘提督坐營及都督有才望者。照舊與公侯伯一體推用。

とあるなどは之である。このように、勳臣を流官と交替させるという問題の中で特筆すべきものに、鎮守兩廣總兵官の場合がある。すなわち湧幢小品卷八、總督總兵の條に、

兩廣總兵。舊皆以勳臣充之。嘉靖四十五年。都給事中歐陽一敬。題請革去。以流官都督代鎮。覆允爲例。

とあるもので、舊來、勳臣が充てられていた兩廣總兵官のポストが、嘉靖四十五年以後は流官の都督のポストになった。その理由を尋ねてみると、當時の兩廣總兵官恭順侯吳繼爵が綿劣で事に任ずるに足らない、という歐陽一敬の劾奏が動機となっているが、それはどうもこの年廣東に發生した寇賊の處置をめぐることであるらしい。そしてこれを契機として、從來、梧州府に駐劄していた兩廣總兵官は廢止され、鎮守廣西總兵官が桂林府に、鎮守廣東總兵官が潮州府に駐劄す

ることとなり、前者には俞大猷が、後者には劉顯が任ぜられたのである。<sup>⑥</sup>

世襲の公侯伯から流官の都督へ、という總兵官人事の基本的動向と併せ、さらに留意すべき點は文臣である總督巡撫、および内臣である鎮守太監と總兵官との關係である。總督巡撫は正統・景泰の頃からしだいに多く設置されるようになって、所管地方の軍務を統べて、總兵もその指揮に服した。<sup>⑦</sup> その統屬關係は萬曆野獲編卷二二、督撫提督軍務の條に、武臣以總兵官爲極重。先朝公侯伯專征者。皆列尙書之上。自總督建後。總兵稟奉約束。卽世爵俱不免庭趨。其後漸以流官充總鎮。秩位益卑。當督撫到任之初。兜鍪執仗。叩首而出。繼易冠帶肅謁。乃加禮貌焉。

とあるによく象徴されている。鎮守太監も同じく正統・景泰の頃からその數が増大してきたので、菽園雜記卷五には、

本朝自己巳之變。各邊防守之寄。益周於前。如各方面有險要者。俱設鎮守太監・總兵官・巡撫都御史各一員。下人名爲三堂。

といっているが、その權威は正徳のとき最高潮に達し、鎮守地方の官吏は一切その指揮にしたがわねばならなかった。<sup>⑧</sup> 故に明代中期においては、總兵官は總督巡撫のみならず鎮守太監にも掣肘せられ、兩者の下風に立ったものといわなければならぬ。

### (二) 南京守備・協守・提督操江

次に南京守備・協守・提督操江の職官表を示せば左のとおりである。

#### 南京守備表<sup>⑨</sup>

景泰 一	守 南京	豐 城 侯 李 賢 (永樂)	天 順 七	守 備 南京	成 國 公 朱 儀 (永樂)
五	守 備 南京	平 江 伯 陳 豫 (永樂)	弘 治 九	守 備 南京	魏 國 公 徐 備 (洪武)

## 南京協守表

隆慶 四	一七	一三	正德 一三襲	嘉靖 七襲	一三
守備南京	守備南京	守備南京	守備南京	守備南京	守備南京
懷寧侯孫世忠(天順)	魏國公徐鵬舉(洪武)	豐潤伯曹松(天順)	撫寧侯朱麒(正統)	魏國公徐鵬舉(洪武)	成國公朱輔(永樂)
崇禎 四	一四	一六	萬曆 二九	崇禎 四	五
守備南京	守備南京	守備南京	守備南京	守備南京	守備南京
忻城伯趙之龍(永樂)	魏國公徐弘基(洪武)	撫寧侯朱國弼(正統)	成山伯王允忠(永樂)	臨淮侯李庭竹(洪武)	

弘治 一	四	二	正德 二	一五	嘉靖 二九
協守南京	協守南京	協守南京	協守南京	協守南京	協守南京
懷柔伯施鑑(天順)	武靖伯趙承慶(成化)	西寧侯宋愷(永樂)	豐城侯李旻(永樂)	安遠侯柳震(永樂)	南寧伯毛文(景泰)
隆慶 一	四	萬曆 一九	隆慶 間	二〇	三七
協守南京	協守南京	協守南京	協守南京	協守南京	協守南京
懷寧侯孫世忠(天順)	彰武伯楊炳(天順)	靈璧侯湯世隆(洪武)	魏國公徐維志(洪武)	定西侯蔣建元(正統)	武靖伯趙祖蔭(成化)

## 提督操江表

成化 三	三	一	弘治 一	八	成化 一四
提督操江	提督操江	提督操江	提督操江	提督操江	提督操江
成山伯王琮(永樂)	定襄伯郭嵩(景泰)	南寧伯毛文(景泰)	豐潤伯曹振(天順)	東寧伯焦俊(天順)	

隆慶	嘉靖	正德	一一	督操江	安鄉伯張恂(永樂)	五	提督操江	永康侯徐喬松(永樂)
			四	提督操江	永順伯薛勳(永樂)	二	提督江南	保定伯梁繼藩(洪熙)
隆慶	嘉靖	正德	一五	提督操江	豐潤伯曹愷(天順)	四	提督操江	泰寧侯陳良弼(永樂)
			一六	督操江	襄城伯李全禮(永樂)	二〇	提督操江	豐城侯李環(永樂)
隆慶	嘉靖	正德	九	提督操江	遂安伯陳鏞(永樂)	二九	操江	襄城伯李成功(永樂)
			一三	提督操江	廣寧伯劉泰(永樂)	三七	提督操江	魏國公徐弘基(洪武)
隆慶	嘉靖	正德	一五	提督操江	伏羌伯毛漢(成化)	中	提督操江	懷寧侯孫承蔭(天順)
			二	提督操江	誠意伯劉瑜(洪武)	一一	提督操江	誠意伯劉孔昭(洪武)
隆慶	嘉靖	正德	二	提督操江	保定伯梁繼藩(洪熙)	一四	提督操江	鎮遠侯顧鑑迹(永樂)

永樂十九年に都が北京に遷されると、南京は留都とも稱され、はじめて南京守備の官が置かれて南京の諸衛を管轄し、留都の防衛、陵寢の守護、人民の撫卹、盜賊の禁戢などに任ずることとなった。その役所を守備廳という。南京守備の官は公侯伯の専缺で、南京五軍都督府中の中軍都督府を兼領するのが例であるが、この中軍都督府こそは南京諸衛を統轄する中核であった。また協同守備はその次官で、景泰三年に添設されたものであり、公侯伯または都督をもって之に充てゐる例である。なお、勳臣の南京守備に對し、同様の職掌をもつものとして内臣の場合には洪熙元年に設けられた南京守備太監があり、文臣の場合には宣德十年、參贊機務なる官が設けられ、成化二十三年以後は南京兵部尚書の兼銜となった。南京六部の諸官中最も重きをなしたものはこの參贊機務の官である。したがって勳臣の南京守備、内臣の南京守備太監、文臣の參贊機務は、表面上、相鼎立して存在するものようであるが、實際は太監こそが皇帝の代表で、公侯伯は之に俯首聽命するものであった。南京守備は南京軍事の最高指揮官であり、勳臣のポストとしては最も重要なものの一つであるが、内臣との力關係においてみると、明代中期においてはむしろその下位にあったというのが實情であらう。

提督操江は九江より鎮江に至る間（一時はさらに下流の狼山・福山港まで）の江防を擔當し、沿江の水兵・陸兵を簡閱訓練するとともに、盜賊や鹽徒の巡捕、倭寇の防禦などを職とするものである。これにも勳臣と文臣が並び任ぜられた。皇明世法錄卷四五、江防總論には、

成祖時。特勅通侯爲總帥。時江操。其後。兼用都御史。

とあり、操江はもと勳臣の職掌であつたが、のち都御史を兼用するようになったという。明史卷七五、職官志、提督操江の條には「以副僉都御史爲之。領上下江防之事」とあり、文臣の場合は副都御史または僉都御史をもつてこの任に充てたのである。ところで勳臣と文臣との力關係ということになると、それは十分明瞭ではないが、趨勢としてはやはり時代の降るにしたがい文臣の方が力をもつてきたようである。實錄、成化十三年七月癸酉の條には、南京前軍都督府管府事定襄伯郭嵩に命じて操江を專督せしめたことを記し、その理由を述べて、練兵と操江とは一人が同時に兼理できるものではないとしているが、このことは、江防總論には、

成化十三年。命擇武職大臣一人。專操江之職。毋攝營務。以定襄伯郭嵩爲之。

と見え、明史卷九一、兵志、江防の條も之によつてゐる。專督というような語が見えるところから考えると、この頃にはまだ勳臣の操江もかなりその實を有していたことと思われる。ところが、實錄、嘉靖四十二年八月丙辰の條には、給事中范宗吳が、操江都御史と應天・鳳陽二巡撫の所轄地方の分界を定めんことを請い、それが裁可されたことを述べたのち、今後、操江の所轄地方に係わらぬ一切の事務は、都御史がこれに與ることを得ず、といつてゐる。そして江防總論は右の一條を引用した後、なおつづけて、

先是。胡瓚條上明約束專委任二事。魏公徐鵬舉。引舊制以爭。謂。瓚所言。意侵守臣權。非令甲不可聽。兵部申瓚議。上報令如弘治例行。弘治時。勅參贊王繼。軍事與守備成國公朱輔計議。以故云。上心雅欲權歸本兵。不專任操江都御史也。



領圍子手營・坐幼官營表

弘治 一	弘治 三	領圍子手 官軍侍衛 管五軍營 園子手營	豐城侯李璽(永樂)	正德 四	嘉靖 四	領圍子手 官軍侍衛 管五軍營 園子手營	鎮遠侯顧仕隆(永樂)
?	?	坐幼官營	襄城伯孫繼先(永樂)				成山伯王洪(永樂)

弘治 一	正德 八	嘉靖 四	嘉靖 五	弘治 一	正德 八	嘉靖 四	嘉靖 五
掌府軍前衛	掌府軍前衛	掌府軍前衛	掌府軍前衛	掌府軍前衛	掌府軍前衛	掌府軍前衛	掌府軍前衛
武靖伯趙承慶(成化)	靖遠伯王憲(正統)	定西侯蔣叔(正統)	泰寧侯陳良弼(永樂)	隆慶 五	萬曆 二	隆慶 二	隆慶 二
宣城伯衛國本(天順)	武安侯鄭維忠(永樂)	撫寧侯朱繼勳(正統)	臨淮侯李邦鎮(洪武)				

掌府軍前衛表

萬曆 二	萬曆 四	萬曆 四	萬曆 四	萬曆 四	萬曆 四	萬曆 四	萬曆 四
管紅盔將軍	管紅盔將軍	管紅盔將軍	管紅盔將軍	管紅盔將軍	管紅盔將軍	管紅盔將軍	管紅盔將軍
清平侯吳家彥(洪熙)	懷寧侯孫世忠(天順)	武定侯郭大誠(洪武)	定遠侯鄧世棟(洪武)	平江伯陳允兆(永樂)	遼安伯陳澍(永樂)	定西侯蔣建元(正統)	廣寧伯劉嗣德(永樂)
崇禎 一	崇禎 二	崇禎 三	崇禎 四	崇禎 五	崇禎 六	崇禎 七	崇禎 八
管紅盔將軍	管紅盔將軍	管紅盔將軍	管紅盔將軍	管紅盔將軍	管紅盔將軍	管紅盔將軍	管紅盔將軍
武進伯朱世雍(永樂)	西寧侯宋世恩(永樂)	鎮遠侯顧大理(永樂)	恭順侯吳汝蔭(永樂)	南寧伯毛祖德(景泰)	廣寧伯劉嗣爵(永樂)	武平伯陳世恩(天順)	保定伯梁天秩(洪熙)

朝廷において行なわれる聖節・正旦・冬至の三大朝會、その他大祀・誓戒・冊封・遣祭・傳制・御殿などの諸儀禮、および日々の常朝において侍衛の官兵を掌ることは、また勲臣の一職務である。故に萬曆會典卷一四二、兵部、侍衛の條には、

凡掌領侍衛。侯伯駙馬等官六員。一員管錦衣衛大漢將軍及勲衛散騎舍人府軍前衛帶刀官。四員管神樞營紅盔將軍毎日一員輪直。一員管五軍營叉刀官軍。

と記している。紅盔將軍は三千營（＝神樞營）に所屬する侍衛將軍（儀仗兵）であり、府軍前衛は親軍上二十二衛の一つで幼軍を領する。この幼軍は皇太子に隨侍するのが本來の職能であるが、なお朝廷の侍衛にも充てられるのである。また圍子手營・幼官舍人營はいずれも五軍營の附營であるが、これもやはり侍衛の任に當たるのである。これらの兵士はむろん正式に軍勢力として評價すべきものではなく、いわば一種の裝飾物であるにすぎない。そしてとくに注意すべきは、前表中において\*印を附した者のことである。それは本官のほかには職歴の記載がない者で、これが萬曆以後ことに多く見られるのは、勲臣の地位が明末に至ってますます低下し形骸化してきたことを暗に示唆するもののように思われる。

#### (五) 五軍都督府・南京五軍都督府掌印僉書官

次に五軍都督府・南京五軍都督府の職官表を示せば左のとおりである。<sup>④</sup>

#### 五軍都督府掌印・僉書表

洪武二二	領都督府軍	魏國公徐輝祖（洪武）	洪熙一襲	領行在左府	武進伯朱冕（永樂）
仁宗卽位	領後府	成山侯王通（永樂）	宣德二	改右府	同右



宣德 八	洪熙·宣德間	在軍府	成國公朱勇(永樂)	成化間	慶領軍府	英國公張懋(永樂)
一〇	領行在前府	西寧侯宋瑛(永樂)	弘治二	領右府	遂安伯陳韶(永樂)	
一〇	領前府	陽武侯薛訥(永樂)	五	掌後府	保國公朱永(正統)	
一〇	領左府	安鄉伯張安(永樂)	一三	領前府	鎮遠侯顧溥(永樂)	
正統一	領中府	安遠侯柳溥(永樂)	一三	佐後府	襄城伯李郟(永樂)	
二三	領前府	魏國公徐承宗(洪武)	一三	領左府	寧晉伯劉福(成化)	
二三	領左府	修武伯沈榮(正統)	正德一	領後府	惠安伯張偉(外戚)	
一四	領中府	成安侯郭晟(永樂)	一	領右府	平江伯陳熊(永樂)	
一四	領前府	建平伯高遠(永樂)	正德三鎮兩廣	慶兼軍府	武定侯郭勛(天順)	
一四	領前府	忻城伯趙榮(永樂)	正德四	領後府	廣寧伯劉佑(永樂)	
正統一四襲	領左府	定西侯蔣琬(正統)	四	領前府	懷寧侯孫應爵(天順)	
景泰七	領右府	西寧侯宋誠(永樂)	總神機營四	慶掌軍府	會昌侯孫銘(外戚)	
天順一	領右府	安遠侯柳溥(永樂)	正德六	掌前府	成國公朱輔(永樂)	
一	領右府	廣寧伯劉安(永樂)	六	掌前府	武靖伯趙弘澤(成化)	
天順一進世侯	掌後府	會昌侯孫繼宗(外戚)	正德一〇襲	慶典軍職	靖遠伯王瑾(正統)	
天順一還鎮	領左府	保定伯梁琦(洪熙)	一五	領中府	定國公徐光祚(永樂)	
成化一	掌右府	宣城伯衛穎(天順)	正德中	左府僉書	崇信伯費柱(宣德)	
八	管後府	同右	嘉靖二	領中府	鎮遠侯顧仕隆(永樂)	
一七	慶典軍職	新寧伯譚祐(永樂)	七襲	慶典軍府	豐潤伯曹松(天順)	

世宗南巡	領中府居守	廣寧伯劉泰（永樂）	三九	僉書中府	廣寧伯劉允中（永樂）
嘉靖一〇襲	慶典戎職	崇信伯費棣（宣德）	四二	掌左府	撫寧侯朱岳（正統）
一一	右府僉書	彰武伯楊質（天順）	四四	領左府	英國公張容（永樂）
一二	都督中軍	誠意伯劉瑜（洪武）	四四	領中府	西寧侯宋天馴（永樂）
一四	領中府	東寧伯焦棟（天順）	四五	領前府	廣寧伯劉允中（永樂）
一五	領後府	定遠侯鄧繼坤（洪武）	四五	僉書左府	伏羌伯毛登（成化）
一五襲	慶典軍務	成國公朱希忠（永樂）	二	僉書中府	懷遠侯常文濟（洪武）
二〇	右府僉書	武靖伯趙世爵（成化）	二	領右府	定西侯蔣佑（正統）
二一	僉書中軍	崇信伯費煒（宣德）	五	領右府	定國公徐文璧（永樂）
二一	都督府事	撫寧侯朱岳（正統）	五	領後府	成國公朱希忠（永樂）
二二	僉書中府	撫寧侯朱岳（正統）	五	領中府	寧陽侯陳大紀（永樂）
二五召還	慶典軍職	定西侯蔣傅（正統）	五	領左府	保定伯梁繼藩（洪熙）
二九	領前府	豐城侯李熙（永樂）	五	改前府	定西侯蔣佑（正統）
二九	領後府	平江伯陳圭（永樂）	五	領左府	豐潤伯曹文炳（天順）
二九襲	慶典軍府	武定侯郭守乾（洪武）	五	領中府	伏羌伯毛登（成化）
三〇	領中府	定國公徐廷德（永樂）	五	領中府	保定伯梁世助（洪熙）
三〇襲	右府僉書	彭城伯張熊（外戚）	二	慶典軍職	平江伯陳王謨（永樂）
三三襲	慶典軍兩府	南和伯方炳（景泰）	三	領前府	安鄉伯張鉉（永樂）
三七	僉書後府	宣城伯衛守正（天順）	四	後府僉書	定遠侯鄧世棟（洪武）
三九	領左府	恭順侯吳繼爵（永樂）	四	中府僉書	臨淮侯李言恭（洪武）
三九	僉書中府	應城伯孫文棟（永樂）	四	中府僉書	臨淮侯李言恭（洪武）



南京五軍都督府掌印・僉書表

正統	一	領南京中府	豐城侯李賢(永樂)	一〇	南京前府	成安侯郭寧(永樂)
天順	一	理南京軍府	忻城伯趙榮(永樂)	一〇	領南京後府	保定伯梁永福(洪熙)
	一	領南京中府	定襄伯郭登(景泰)	一三襲	守備南京	魏國公徐鵬舉(洪武)
	六	領南京後府	成安侯郭昂(永樂)	一六	領南京前府	襄城伯李全禮(永樂)
成化	三	領南京後府	成山伯王琮(永樂)	嘉靖一	提督操江	遂安伯陳鏐(永樂)
	九	領南京中府	武安侯鄭宏(永樂)	一	改右府	保定伯梁永福(洪熙)
	一三	領南京前府	定襄伯郭嵩(景泰)	四	領中府	魏國公徐鵬舉(洪武)
成化	中	慶領南京軍府	隆平侯張祐(永樂)	嘉靖提督操江	慶典軍職	廣寧伯劉泰(永樂)
弘治	八	領南京前府	東寧伯焦俊(天順)	嘉靖一	領南京左府	寧陽侯陳繼祖(永樂)
	八襲	領南京左府	懷柔伯施瓊(天順)	一	領南京前府	新寧伯譚綸(永樂)
	九	協守南京右府	武靖伯趙承慶(成化)	一三	食書南府	臨淮侯李沂(洪武)
	一	領南京左府	保定伯梁任(洪熙)	一三	領南京前府	誠意伯劉瑜(洪武)
	一	領南京前府	安鄉伯張恂(永樂)	一三襲	慶典軍府	伏羌伯毛漢(成化)
	一	領南京後府	清平侯吳琮(洪熙)	一四	領南京後府	懷遠侯常元振(洪武)
	一三	守備南京中府	成國公朱輔(永樂)	?	慶典軍府	靈璧侯湯佑賢(洪武)
	一八	領南京後府	南寧伯毛良(景泰)	一三	領南京前府	定西侯蔣傳(正統)
正德	二	協領右南京	西寧侯宋愷(永樂)	嘉靖提督操江	慶典軍府	臨淮侯李庭竹(洪武)
	四	領南京前府	永順伯薛勳(永樂)	嘉靖二八襲	京軍領南府	誠意伯劉世延(洪武)

二九	領南京前府	保定伯梁繼藩(洪熙)	改中府	同右
三三襲	京軍兩府	南和伯方炳(景泰)	領南京後府	應城伯孫文棟(永樂)
三四	領南京前府	懷遠侯常文濟(洪武)	兼領後南京	魏國公徐維志(洪武)
三四	府僉書	伏羌伯毛桓(成化)	領右府	豐城侯李環(永樂)
三六	領南京左府	新寧伯譚功承(永樂)	提督操江府	魏國公徐弘基(洪武)
四三	領南京左府	豐潤伯曹文炳(天順)	府僉書	定遠侯鄧紹煜(洪武)
四五	領南京右府	永康侯徐喬松(永樂)	領南京右府	襄城伯李成功(永樂)
四五	領南京前府	南寧伯毛國器(景泰)	領守中府	成山伯王允忠(永樂)
再	京軍兩府	南和伯方壽祥(景泰)	領守南京	魏國公徐弘基(洪武)
隆慶	協守南京府	懷寧侯孫世忠(天順)	協守後南京	武靖伯趙祖蔭(成化)
四	領中府	同右	領南京右府	誠意伯劉蓋臣(洪武)
五	領南京左府	安遠侯柳震(永樂)	領南京左府	成山伯王國柱(永樂)
隆慶	協守南京	靈璧侯湯世隆(洪武)	領南京前府	定西侯蔣承勳(正統)
萬曆	領後南京	魏國公徐邦瑞(洪武)	領南京後府	東寧伯焦夢熊(天順)
二	領南京中府	恭順侯吳繼爵(永樂)	領南京左府	靖遠伯王永恩(正統)
四	領南京右府	武定侯郭大誠(洪武)	領南京後府	南和伯方一元(景泰)
四	領南京右府	泰寧侯陳良弼(永樂)	兼領中府	撫寧侯朱國弼(正統)
九	領南京軍府	懷遠侯常允緒(洪武)	領南京左府	懷柔伯施壯猷(天順)
一一	府僉書	安遠侯柳震(永樂)	京中府	隆平侯張拱薇(永樂)
一一	府僉書	忻城伯趙泰修(永樂)	領南京右府	誠意伯劉孔昭(洪武)

## 一四

領南京右府

鎮遠侯顧肇迹（永樂）

## 一四

領南京前府

成安侯郭祚永（永樂）

明代の五軍都督府は、宋・元の樞密院に比せられる國家最高の軍事官廳である。そして宋代の樞密院がもっぱら文臣によって構成され、元代の樞密院にも少數ながら文臣を参えていたのと比べると、明代の五軍都督府はまったく武臣のみによって構成されていたところに特色がある。しかもその長官である都督の品階は正一品（ちなみに公侯伯は正一品の上に位する<sup>①</sup>）で、六部尚書、都察院都御史がいずれも正二品であるに比し一段と高い。これは明朝が國初、軍事を重視し武臣を優待した態度の端的な現われであり、國家制度上とくに注目すべき點である。

さて、この五軍都督府における勳臣のあり方であるが、前表において見られるように、その人數は他の諸表中に見られる人數に比べて遙かに多く、この點、五府は勳臣の根城であるとの感がことさらに深い。ところで、これを時代の推移に照らして考察すると、春明夢餘錄卷三〇、五軍都督府の條には、

洪武十三年。始分中左右前後五軍都督府。各府都督。初間以公侯伯爲之。參贊軍國大事。後率以公侯伯署府事。同知僉事則參贊軍事。

といい、また、

明初勳臣。俱充參遊。後止充兩廣・湖廣・漕運三總兵。又次第革而惟戎政五府屬焉。五府僉書猶有以都督充者。至掌印則必勳臣。嘉靖八年令。五府掌印官。都督有才望者。一體推用。終不能行。

といっている。すなわち明初、勳臣は多く邊方にあつて總兵・參遊などとなり、五府の都督は一般の武將から任ぜられるものが多かった。ところが時代が降るにしたがい、邊方に配置されていた勳臣はしだいに中央に吸収される傾向となり、嘉靖の頃にもなると、五府はあたかも勳臣の巢窟あるいは吹き溜りともいふべき觀を呈するに至つたのである。そして僉書官には都督をもつて充てることもあったが、掌印官は必ず勳臣であつたといふ<sup>②</sup>。

次に問題となるのは五軍都督府の權力の低下、權限の縮小である。元來、兵部と五軍都督府とは、一は軍政一は統兵を掌るところで、兵部は出兵の權あつて統兵の權なく、五府は統兵の權あつて出兵の權なく、兩者はたがいに相制肘しあう關係にあるとされている。五府と兵部とを相對置した本意は、たしかにそうであつたのであろうが、弇山堂別集卷五三、大都督府左右都督同知僉事表の前文を見ると、

(洪武)十三年。分大都督爲五軍都督府。見若以爲品秩。如其故者。而兵部陰移之。其權漸分矣。至永樂而盡歸之兵部。所謂五都督者。不過守空名與虛數而已。

とあり、五府の實權は永樂以來すでに兵部に奪われ、ほとんど空名と虚數を守っているにすぎなかつた。このような狀況を明史卷九〇、兵志、衛所の條にはまた、

正德以來。軍職冒濫。爲世所輕。內之部科。外之監軍督撫。疊相彈壓。五軍府如贅疣。弁帥如走卒。總兵官領敕於兵部。皆踞間爲長揖。卽謂非體。

といつており、明代中期の五軍都督府は、まさに軍事機構の「贅疣」にすぎなかつたのである。こうした五府と兵部との關係のほか、今一つ注意すべきは五府と京營との關係である。この點に觸れた記事として、まず今言類編卷四、經武門、兵權の條には次の一文がある。

祖宗微意。不欲武臣權重。在內營操官。止管操練者。無開設衙門。亦無印信。在內五府。有衙門印信。理常行政務。至於營操。非特命不得干預。蓋五府三營十二營。職掌不相侵也。

つまり五府は政務を執行し、京營は操練を管掌してたがいに權限を分離し、原則として之を侵犯しなかつたというのである。ただ右の文ではそれがいつからの情況であるかは明らかに示されていないが、資治通鑑綱目三編卷一一には、景泰二年十二月、團營を立てたことについて附註し、

明初。京營兵隸五軍都督府。永樂中。復置京軍三大營。于是。五都督府雖仍舊制。其掌府者。治常行文書而已。非特命

## 不預營事。

といい、永樂以來のこととしている。三編の文は、恐らく直接には皇明世法錄の記事によるものと思われるが、世法錄もこれを永樂に繋けることについては、さほど明言しているわけではない。しかし西園聞見錄卷六三、兵部、京營の條には、三大營について、

(周應賓曰) 自是而後。朝廷北征沙漠。南討交趾。京營之兵。因以團聚不散。營與府。掣而爲二。寢失隸屬之舊矣。といひ、また五府について、

(朱國祚曰) 自有大營團營。而兵不隸于五府。虛存尺籍。無作爲之權。

といっている。周應賓・朱國祚は共に萬曆の進士で、前者は禮部尙書となり、後者も禮部尙書・東閣大學士となった明末の政治家である。永樂に入って三大營が設立されてより、五府と京營との統屬關係がうすれたことは、兩者の言説に鑑みてほぼ疑いないところであろう。<sup>④</sup>之を要するに五軍都督府なるものは、明初その格式が異常に高く定められたにもかかわらず、詳らかに永樂以後の實態についてみると、その軍事機構の上における役割は決して大きくはなかったのである。

## (六) 京營提督坐營官・總督京營

次に京營の提督・坐營官および總督京營の職官表を示せば左のとおりである。

## 京營提督・坐營官表

正統 一四	領神機營	安遠侯柳溥(永樂)	一二	坐五軍營	靖遠伯王添(正統)
天順 七	坐三千營	東寧伯焦壽(天順)	一六	坐神機營	豐潤伯曹振(天順)
成化 一〇	領團營	定西侯蔣琬(正統)	弘治 一	提督神機營	平江伯陳銳(永樂)



一五	一四	一四	一四	一三	一三	一一	九	八	四	四	三	三	三	三	三	三	三	一	一
營坐 管効 操勇	五軍 營管 操	顯武 營管 操	領五 軍營	領三 管千 操	領三 管千 營	營領 管五 操	神機 營左 哨	坐揚 威營	坐揚 威營	營坐 左五 軍	坐練 武營	坐三 千營	營坐 左五 軍	神機 營左 哨	神機 營右 哨	五軍 營坐 營	坐耀 武營	領神 機營 五千 下管 操	領三 千營
武定 侯郭 良(洪 武)	會昌 侯孫 銘(外 戚)	南和 伯方 壽祥(景 泰)	崇信 伯費 柱(宣德)	興安 伯徐 盛(永樂)	安遠 侯柳 景(永樂)	建平 伯高 隆(永樂)	懷柔 伯施 瓚(天順)	襄城 伯李 黼(永樂)	武平 伯陳 綱(天順)	永順 伯薛 勳(永樂)	懷柔 伯施 鑑(天順)	東寧 伯焦 俊(天順)	南和 伯方 壽祥(景 泰)	興安 伯徐 盛(永樂)	陽武 侯薛 倫(永樂)	永康 侯徐 錡(永樂)	武安 侯鄭 英(永樂)	武靖 伯趙 承慶(成 化)	遂安 伯陳 紹(永樂)
正德																			
一二	一〇	九?	六	六	四	四	四	四	四	四	三	三	三	二	一	一七	一七	一六	一五
營坐 管奮 操武	神機 營下 坐營 武	神機 營下 坐營 武	神機 營下 坐營 武	神機 營下 坐營 武	總神 機營	坐五 軍營	管五 軍營	掌三 千營	神機 營管 操	提督 團營	總神 機營	坐五 千營	提督 團營	提督 團營	提督 團營	坐神 威營	五軍 營下 營	領神 機營	提督 團營
英國 公張 崙(永 樂)	定西 侯蔣 勳(正 統)	撫寧 侯朱 麒(正 統)	清平 侯吳 傑(洪 熙)	安鄉 伯張 坤(永 樂)	會昌 侯孫 銘(外 戚)	武靖 伯趙 弘澤(成 化)	新寧 伯譚 祐(永 樂)	恭順 侯吳 世興(永 樂)	武定 侯郭 勛(洪 武)	同右	懷寧 侯孫 應爵(天 順)	永順 伯薛 勳(永 樂)	惠安 伯張 偉(外 戚)	武平 伯陳 勳(天 順)	會昌 侯孫 銘(外 戚)	懷寧 侯孫 應爵(天 順)	定西 侯蔣 驥(正 統)	保國 公朱 暉(正 統)	南寧 伯毛 良(景 泰)

總督京營表

嘉靖三一		隆慶	
總京營	豐城侯李熙(永樂)	總京營	恭順侯吳繼爵(永樂)
總京營	鎮遠侯顧寰(永樂)	總京營	彰武伯楊炳(天順)
總京營	四〇	總京營	四四
萬曆一四			
總督京營	臨淮侯李言恭(洪武)	總京營	寧陽侯陳應詔(永樂)
總京營	永康侯徐應坤(永樂)	總京營	忻城伯趙世新(永樂)

嘉靖			
一六	坐鼓勇營	陽武侯薛倫(永樂)	一〇
一六	坐果勇營	宣城伯衛鏞(天順)	一〇
一六	坐耀武營	寧晉伯劉岳(成化)	一二
一	領五軍營	西寧侯宋良臣(永樂)	一四
二	坐耀武營	會昌侯孫杲(外戚)	一四
三	顯武營管操	咸寧侯仇鸞(正德)	一六
四	坐練武營	廣寧伯劉泰(永樂)	一七襲
四	坐神機營	伏羌伯毛江(成化)	一八
五	坐立威營	東寧伯焦棟(天順)	二七
七	坐營管操	南寧伯毛良(景泰)	二七
七	坐營管操	咸寧侯仇鸞(正德)	二八
九	神機營坐營	成國公朱鳳(永樂)	二八
九	坐營管操	西寧侯宋良臣(永樂)	二八
總五軍營	東寧伯焦棟(天順)	坐五軍營	武靖伯趙世爵(成化)
充五軍營	會昌侯孫杲(外戚)	右哨五軍營	遂安伯陳鏐(永樂)
提督團營	宣城伯衛鏞(天順)	宣城伯衛鏞(天順)	保定伯梁繼藩(洪熙)
提督神機營	坐五軍營	營右哨	惠安伯張綱(外戚)
屢典營務	揚威營坐營	成安侯郭瓚(永樂)	南和伯方東(景泰)
坐揚威營	懷寧侯孫兼元(天順)	寧陽侯陳繼祖(永樂)	南寧伯毛重器(景泰)
坐効勇營	掌神機營	坐立威營	

崇禎 四七			
一	總 京 營	一六	總 京 營
總 京 營	泰寧侯 陳良弼(永樂)	總 京 營	成國公 朱純臣(永樂)
	惠安伯 張慶臻(外戚)		襄城伯 李國楨(永樂)
	襄城伯 李守筠(永樂)		

京營に關する事項は本稿の主題であり、次章において詳説するが、ここで鎮守總兵官表以下の諸表を通じて伺われる傾向と特徴について一言しておこう。それは時代的にいえば、鎮守總兵官の場合は弘治以前の任命に係る事例が相當に多いのであるが、その他の職種にあっては、弘治以後の任命に係る事例が壓倒的に多いことである。また地域的にいえば、總兵官の場合は北京・南京以外の全國各地、ことに北邊や兩廣・湖廣に赴任するわけであるが、その他の職種にあってはことごとく北京あるいは南京に在任するもので、つまり明代中期以後においては勳臣の任地が地方から中央へ集中するという現象が目立つことである。そしてその職務の内容からいえば、總兵官の職が本來的には國防の第一線に立つものとして、軍事上の重要度が極めて高いのに比べ、その他の職種は概して閑職あるいはそれに近いもので、その間に勳臣の職務の形骸化が伺われることである。且つそれらの職種にあっては、たいていその任命の事例が明末の萬曆・崇禎の時代にまで及んでいる。ところが、最後に擧げた京營の提督・坐營官の場合はこれらと異なり、いわば地方の鎮守總兵官に匹敵する職であり、勳臣のポストとしては最も重要性をもったものである。そしてその任命の情況を見ると、嘉靖二十八年の事例を最後として以後まったく現われず、總督京營の場合のみ崇禎の時代にまで及んでいる。これはいったい、明代史上においていかなる意味をもつものであろうか。次章においてはこの點を中心としてさらに考察を進めたい。

## 二 嘉靖二十九年の京營改革

### (一) 内臣・武臣・文臣の指揮監督權

京營は、主として中都留守司、山東・河南・大寧各都司所屬の衛所の官軍を、春秋兩班に分かつて京師に番上せしめ、在京諸衛所の官軍と合わせて之に操練を施す軍事機關であり、明代における中央軍の據點となつた處である。さて、すべての制度がそうであるように、明代京營の制も長い年月を經過する間には、内外の諸原因によつていくたびか改組再編の歴史を繰り返してきた。すなわち永樂の三大營が土木の變によつて崩壊し去つたのち、景泰三年に十團營が設立されたのはじめ、天順元年の三大營、成化三年の十二團營、正徳八年の東西兩官廳など、いずれも營内の缺陷を除去して京軍の強化をはかることにその目的があつたが、なかでも嘉靖二十九年に至り三大營の舊に復したことは、以上の諸改革に比べてその意義が一層重大であつたといえる。前章の末尾において最も注目したことは、勳臣の提督・坐營官が嘉靖二十八年の任命を最後に斷絶していることであつたが、それはこの嘉靖二十九年における京營の大改革に由來するものである。そこでまず問題がそこに至るまでの經過を、とくに指揮監督權をめぐる人的構成の面から検討してみることとしたい。

元來、京營は洪武のとき武臣のみによつて構成されたのであるが、永樂に至つて内臣が關係し、景泰に至つてさらに文臣が關係したので、以後はだいたい武臣・内臣・文臣の三者が之に關係をもつこととなつた。すなわち景泰三年十二月、三大營の精銳十五萬を擇んで十團營を設立したとき、明史卷七六、職官志、京營の條には、

洫以總兵。統以總督。監以内臣。

といい、同卷八九、兵志、京營の條には、

提督中推一人充總兵官。監以内臣。兵部尙書或都御史一人爲提督。

といっているが、右の「總兵」は武臣の提督、「總督」は文臣の提督で、さらに内臣の提督が之に加わっていたのである。このような三者鼎立の形は以後もひきつづいて變わるところがなかったので、たとえば實錄中の例について見ると、成化三年四月癸丑の條には、

重立十二營。改工部尙書白圭爲兵部尙書。太子少保如故。仍命不妨部事。同定襄伯郭登・太監裴當。提督十二營操練。とあり、弘治元年六月戊申の條には、

茲命爾（工部察院左都御史馬文升）。同太監傅恭・李良・太傅兼太子太師保國公朱永・太保兼太子太傅襄城侯李瑾。通行提督。務令各營官軍。常川操練。

とあり、正徳元年十一月丙申の條には、

勅兵部尙書閻仲宇。同太監苗達・英國公張懋等。提督團營。操練軍馬。

とあり、同十六年九月丙辰の條には、

命太子太保兵部尙書彭澤。同太監張忠・戴永・武定侯郭勛・惠安伯張偉。提督團營官軍。

とある。そしてこのように武臣・内臣・文臣の提督を同時に配置したのは、三者相牽制せしめることにより、權力の濫用を防止するという意味があった<sup>④</sup>。ところで、提督は三大營または十二團營の最上位にある管操官であるが、提督の指揮下には各小營（三大營の中、五軍營・神機營なれば中軍・左掖・右掖・左哨・右哨、三千營なればこれに相應する五司、十二團營なれば奮武營・耀武營・練武營・顯武營・敢勇營・果勇營・効勇營・鼓勇營・立威營・伸威營・揚威營・振威營）を分管する「坐營官」（三千營なれば坐司官）がある。王折の續文獻通考卷一六一、兵考、兵制、京兵の條には、

提督凡有三。曰太監。曰公侯。曰尙書。尙書或專設或部事兼理。坐營則侯伯或都督。營有太監一人。

とあり、これは景泰三年以後嘉靖二十九年に至るまでを通觀しての一般論であるが、これによると、坐營官には武臣と内臣の別があり、武臣の場合は侯伯あるいは都督が之に任ぜられ、なお營ごとに内臣の坐營太監があったのである。

以上のように、京營を指揮監督するものには、内臣と武臣と文臣があつたのであるが、この三者の京營に對する關與の情況とその動向はどのようなものであつたであらうか。まず第一に内臣の場合である。萬曆會典卷一三四、兵部、京營の條に「舊三大營制永樂中定」なる項目があり、それによると、五軍營・三千營・神機營にはそれぞれ提督内臣があり、なお神機營内には中軍・左掖・右掖・左哨・右哨にそれぞれ坐營官があり、さらにその下には監鎗内臣が置かれていたとあるが、三大營に内臣の提督が置かれた年代についてはとくに明言せず、單に「後兼用内臣」とあるのみである。明史卷八九、兵志、京營の條も會典の記事によつており、丁易氏の『明代特務政治』（二五五頁）も明史を引いて之を肯定しているが、果たしていかがであらうか。青山治郎氏の論考『明代景泰朝の團營について』（駿臺史學第二十四號）によれば、實錄中において宦官が京營を「提督」したことがあらわれてくるのは、景泰三年十二月癸巳の條をもつて始めとするものである。しかし景泰の十團營では兵部尙書于謙の指導力が極めて強かつたので、内臣の提督はまだ裏面から節制するものであつた。天順元年にはこの十團營を罷めて三大營に復し、司禮監太監曹吉祥が之を總督したが、内臣の提督が表面から節制するようになったのはこのときに始まるものである。内臣の坐營は景泰・天順の頃よりすでに始まっているが、成化の頃になるとその影響力は一層大となつたらしく、將領はこのために掣肘を受けることが多かつたという。内臣の勢力は景泰より成化にかけて上昇期にあつたのであり、明史卷八九、兵志、京營の條には、（御馬監太監）汪直を用いて團營を總督せしめたことを記したのち、

禁旅專掌於内臣。自帝始也。

といつてゐる。越えて正徳元年には、司禮監太監劉瑾が提督團營を兼ね、同五年には太監張永が京營の兵を率いて安化王寘鐸の叛亂を鎮壓したので、この頃内臣の權勢は極盛期を迎えたが、一方、武臣の提督であつた英國公張懋はすでに老境にあつたため、之を十分に制禦することができなかつたのである。しかし嘉靖に入ると、武定侯郭勛が二十年にわたつて提督團營となり、君寵を侍んで威福を擅まましたので、内臣の提督はその餘波を受け昔日の勢いを失つた。西園聞見錄

卷六三、兵部、京營の條には、

嘉靖初散邊兵。用武定侯郭勳爲帥。故太監張永・尙書李承勛監之。張・李宿將。頗亦欲有所飭勳。與武定不相能。繼以疾卒。而兵政大廢弛矣。

とあり、内臣の勢力はこれより下降期に入る。ことに注意すべきは地方の情勢で、嘉靖八年以後、鎮守太監はしだいに裁革され、十八年にはすべて廢止となつてゐるのである。

次は武臣の場合である。さきに内臣の勢力は成化の頃に至つて一段と強まり、將領がこのために掣肘を受けることをいふたが、こうした情況が起こつてくるのは、一つには世襲的身分である公侯伯出身の將領に、概して軍事的無能力者が多かったという事情にもよるのである。成化中における監察御史魏瀚の<sup>①</sup>上言、弘治中における給事中蔚春の上疏<sup>②</sup>には、すでに勳戚の將帥に對する批判的言辭が現われている。そして嘉靖期に入るとその聲はいよいよ大となり、世襲の勳臣を坐營官・坐司官の地位から追放し、流官の都督をもつて之に替えようとする動きが活潑となつてくるのである。實錄、嘉靖五年十一月丙午の條に見える刑科給事中管律の上言に、

比來五府掌印劄書。五軍三千神機團營等營坐營坐司。類以侯伯爲之。流官擢用者不過一二。以國家兵馬綱領之地。坐擁參養驕侈之徒。平居無虞。恬不知慮。一遇有警。將何賴哉。乞勅所司。嚴加簡汰。而以諸將官有年力勳蹟可備緩急之用者當之。庶幾人才奮勵威武奮揚可以固根本之重折覬覦之姦。且都督流官。無所怙恃。心常小而畏常深。恩之易感。威之易行。公侯伯世爵難饒。有犯不能盡其法。有求必欲盡其恩。此祖宗於兵政。所以重任都督而不輕授侯伯也。

とあるのは之で、これにつづき六年十二月壬子の條に見える大學士張璁の上言、七年正月丁酉の條に見える大學士楊一清の上言も同趣旨のものである。<sup>③</sup>かつての監察御史・給事中の意見が、いまは内閣大學士の意見にまでなつてきたところに、この問題の深刻さを覺える。

第三は文臣の場合である。文臣の提督が京營に對しどの程度關與していたかは必ずしも明瞭でないが、明代中期におけ

る大凡の動向について窺つてみることにしよう。まず之を概括的に示したものとして、萬曆會典卷一三四、兵部、京營、營政通例の條には、

凡督理戎政等官。景泰初年。選精兵團練。以兵部尙書或都御史領之。弘治元年。以都御史提督。領勅行事。後以兵部尙書兼提督。嘉靖六年題准。特設都御史一員。專一提督團營軍務。領勅行事。

とあり、明史卷七二、職官志、兵部附協理京營戎政の條には、

協理京營戎政一人或尙書或侍郎或右都御史掌京營操練之事。永樂初設三大營。總於武將。景泰元年。始設提督團營。命兵部尙書

于謙兼領之。後罷。成化三年復設。率以本部尙書或都御史兼之。嘉靖二十年。始命尙書劉天和。輟部務另給關防。專理戎政。

とある。また同書卷一一一、七卿年表の兵部尙書欄・左右都御史欄にも、成化十一年より嘉靖二十四年にかけて、王越・馬文升・李承勛・汪鉉・王憲・王廷相・劉天和・路迎等が、團營（京營）を提督したことを記している。しかし前掲史料の記載には相互に出入があるので、これを一應の基準としながら、實錄についてさらに事例を精査することとする。

そもそも文臣が提督として京營に關係するようになったのは、景泰三年（職官志に景泰元年とするは誤り）以來のことであり、兵部尙書の于謙が提督團營を兼ねたことに始まる。そしてこのとき、彼の指導力が極めて強かったことはすでに一言した。次に職官志にいう成化三年の事例は、實錄では同年四月癸丑の條に當たり、兵部尙書の白圭をして「不妨部事」、十二營を提督せしめたのである。次に七卿年表に見える成化十一年の王越の事例は、實錄では同年二月乙巳の條に當たり、左都御史の同人に命じて十二團營を提督せしめたのである。次に會典にいう弘治元年の事例は、實錄では同年六月戊申の條に當たり、都察院左都御史（翌二年二月乙卯兵部尙書となる）の馬文升をして團營を提督せしめたのであるが、彼が團營を提督する以前においては、文臣の提督はしばらく絶えていた。次に會典・明史のいずれにも見えないものに、實錄、弘治十八年七月戊子の條がある。それによると、從來、提督團營を兼ねていた兵部尙書の劉大夏が、このときから兵部左侍郎の許進と



事を共にするようになったので、恐らく實質的には許進が團營を提督することになったものと思われる。そしてその理由については、

先是大夏言。部事叢冗。恐誤營務。請如景泰間例。添官提督。故有是命。

とあり、本來劇職である兵部尙書（本兵）をもって提督團營を兼ねることには、多大の無理があったことが知られる。次に會典にいう嘉靖六年の事例は、實錄では同年十二月己未の條に當たる。すなわち大學士楊一清等の上陳中に、

兵部尙書。職重事繁。不應兼掌營務。乞專設都御史爲提督。令大臣舉素負才望諳兵政試有成績者充之。

とあり、兵部尙書（本兵）は劇職であるから、都御史を專設して提督となさんことを乞い、之が裁可されたのである。しかしその實際の人事についてみると、當時、刑部尙書であつた李承勛を兵部尙書兼都察院左都御史として團營を提督せしめたのであつて、都御史といわんよりはむしろ兵部尙書であつた。但しこのとき本兵には王時中が任ぜられていたので、李承勛の場合は京營兵部尙書であつたが、その後彼は嘉靖八年二月、胡世寧に代わつて本兵に任ぜられ、京營を兼督することになったのである。そこで實錄、嘉靖八年四月癸酉の條を見ると、李承勛は、正徳のはじめ許進が兵部侍郎をもつて營務を提督した例にならい、兵部左侍郎の王廷相、右侍郎の黃衷を擧げ提督に就かしめようとしているが、それは裁可するところとならず、李承勛が「不妨部事」、提督團營を兼ねることで落着いている。次に七卿年表に見える嘉靖十三年の王廷相の事例は、實錄では同年二月癸酉の條に當たる。これによれば、團營は重務であるから、兵部尙書（本兵）の王憲が兼攝するのは困難であるとし、都察院左都御史の王廷相を兵部尙書兼都察院左都御史に任じて團營を提督せしめ、王憲には兵部の事を專理せしめているのである。次に職官志にいう嘉靖二十年の事例は、まず實錄、同年九月己亥の條に、南京戸部尙書劉天和を改めて兵部尙書となし、團營を提督せしめたとして見えるが、つづいて同月丁未の條には、兵部の條陳した十二事の一款に、

一、令甲。凡京營文武提督大臣。不得署府部事。故職專政舉。乃令營務久隳。調撥旁午。尤非可兼攝者。乞令成國公朱

希忠・兵部尙書劉天和。並解府部事。另給關防。專理兵政。（得旨允行）

とある。すなわち劉天和の場合は部事を解いた上（本兵は張瓚であつた）、別に關防（官印）を給して兵政を專理せしめたので、提督團營の獨立性は一層強まったわけであるが、實錄によれば、この記事の直前乙未の條に「蜩國公郭勛。有罪下詔獄。云云」の記事があり、嘉靖前半期の提督團營として權勢頗る強かつた郭勛失脚の直後に當たる。別に關防を給して兵政を專理する必要があつたのはこの事に關係があろう。

以上の諸事例から、明代中期（成化・弘治・正徳）において文臣の提督が關與した情況を見ると、兵部尙書（本兵）をもつて兼任するのが最も一般的な方式であつたことが分かる。しかしそこには實際問題として無理があつたので、嘉靖六年および二十年には、本兵とは別個に京營兵部尙書を置いて營務を專理せしめる例が起つてゐるのである。逆にいえば正徳の時までは、兵部尙書を添設して營務を專理せしめるという例がなかつたのであるが、この點は正徳十一年、王瓊の「審大計以重本兵疏」（明臣奏議卷一四）に最もよく表明されている。少しく長文にわたるが該當部分を左に引用しておく。

臣謹奏。看得工科給事中翟瓚所言添設提督以振軍旅等四事。俱係京營要務。合就查議明白。開立前件。伏乞聖裁。一添提督以振軍旅。查得。正統十四年。因邊人犯順。欽命太子少保本部尙書于謙。不妨部事。總督軍務。景泰三年。該于謙會同武清伯石亨等。議得。邊人額森背逆天道。聚衆近疆。若不豫爲設法選練。設使遣將調兵。兵不識將意。將不識軍情。恐號令不一。致誤事機。合無于五軍三千神機營。揀選精銳馬步官軍一十五萬。分爲十二營。揀選廉能驍勇之人。管領操練。俱聽臣等往來提督等因。奉景皇帝聖旨是。欽此。天順年間。邊方寧靖。十二營罷立。總督官亦不復設。成化三年。爲整飭兵備事。該司禮監太監懷恩等。奏該本部議擬。復立十二營。團聚操練。會推大臣一員提督。本年四月二十日具題。節該奉憲宗皇帝聖旨。太子少保白圭兼兵部尙書。不妨部事。提督十二營操練。欽此。成化十一年。白圭病故。該太監懷恩。傳奉憲宗皇帝聖旨。太子少保左都御史王越。不妨院事。著提督十二營。操練人馬。欽此。以後。本部尙書馬

文升・劉大夏・許進・閻仲宇・劉宇・曹元・王敞・何鑑・陸完並今臣瓊。俱不妨部事。奉敕提督十二團營。今。給事中翟瓚。奏要查照景泰・天順・成化等年事例。添設或尙書・侍郎・都御史一員爲總提督。常川在營會同操練。不妨以他務。不奪以他官。無非欲委任專一整飭軍旅之意。不爲無見。但查前項節年事例。于謙等俱以本部尙書。不妨部事提督。內。王越以左都御史。不妨院事提督。今要添設一員。專管提督。係于事體重大。臣等擅難定擬。伏乞聖裁。：疏入得旨。提督官不必添設。其餘准議。

右の文によると、文臣の提督は正統十四年、兵部尙書の于謙が軍務を總督したことに始まるが、天順年間には十二團營（十團營の誤り）が罷められ、總督も設けられなかった。ついで成化三年にまた十二團營が立てられると、兵部尙書の白圭が提督團營を兼ね、同十一年（十年十一月の誤り）に彼が病死すると、左都御史の王越が之に代わった。以後は兵部尙書の馬文升・劉大夏・許進・閻仲宇・劉宇・曹元・王敞・何鑑・陸完・王瓊が相次いで十二團營を提督したのである。王瓊は工科給事中翟瓚の上言、すなわち尙書・侍郎・都御史の中に一員を添設し、之を總提督に任じて營務を專理せしめようとする意見を支持しているのであるが、それは裁可されずして了った。この上疏で、成化・弘治・正徳年間、文臣の兵部尙書（王越は都御史）が提督團營として關與してきた情況が分かるが、それは概して指導力の弱いものであった。しかし嘉靖期に入ると、前述のように六年および二十年の事例があり、指導力はしだいに強くなってきたものと解し得る。この點はとくに注意すべきであらう。

之を要するに、嘉靖の前半期において、内臣の勢力は下降しつつあり、武臣においては世爵より流官への期待が表面化し、文臣の勢力は上昇しつつあるというのが大凡の情況と動向である。

## (二) 京營改革の人事面

さて、嘉靖二十九年における京營の大改革であるが、この大改革が行なわれるに至った直接の動機は、この年に起こっ

た北虜アルタンの北京侵入事件である。すなわち同年八月、アルタンは套虜諸部を糾合して北邊から入寇し、北京附近を分掠しつつその前鋒七百餘騎は安定門にまで迫近した。このとき朝野の驚きは非常なものであり、長らく西苑に引き籠もったままついぞ視朝をすることのなかった嘉靖帝が、急に大内に歸つて奉天殿に出御したという一事からも、凡そその景況は察せられる。時に團營の兵は五、六萬人に及ばず、驅つて城門を出づれば皆流涕して敢て前まず、諸將領もまた相顧みて色を變じたという。アルタンの入邊より出邊までは約一カ月にすぎなかったが、これはいわば青天の霹靂ともいふべきほどの衝擊であり、年來幾多の問題を抱えていた京營にとつては、まさに一大試練といつてよいものであった。この事件のあつた直後、京營の大改革が一舉に日程に上つたのはまことに故なしとしない。

そういうわけで、嘉靖二十九年における京營の改革は、機構的には十二團營・兩官廳の名目を革去し、その官軍をことごとく五軍營に併入し、舊來の三千營(改革後神樞營という)・神機營と並べて三大營とするものであったが、その際とくに重要なのは人事面であつた。この點については、大學士嚴嵩・李本および吏部左侍郎王邦瑞(當時、提督團營軍務の職を兼ね)が逸早くその意向を開陳しているが、その意向を承けた兵部の京營改革六カ條の中には、

四、議革内臣以清宿弊。自古宦者不得典兵。今三大營内。尙有内臣提督監槍等項。不下二三十人。此輩既不知兵。又專以役占爲務。但宜裁革。

五、議選邊將以壯士氣。見在提督坐營公侯伯等官。各令自陳去留。取自上裁。都指揮以下。兵部同管理文臣。汰去不職。選知兵之將充之。使本營將領各練本營士卒。遇警卽率所部出征。不得更諉他人。

と見える。すなわち第四條は内臣の提督・監槍官を裁革すること、第五條は公侯伯の提督・坐營官を追放し、軍事の實際に通曉する邊將をもつて之に替へることである。なお、右兵部の條陳中には見えないが、嚴嵩・李本の上言中には、

吏部選才望大臣一員。專理營務。令其簡練在營人馬。

とあり、營務を專理する文臣の設置を提唱している。こうして改革の人事は次のように行なわれた。

提督京營總兵官

威寧侯 仇鸞<sup>①</sup>

贊理京營軍務文臣

兵部左侍郎兼都察院右僉都御史 王邦瑞

協同提督官

陝西鎮守總兵 成勳 (五軍營) 宣府副總兵官 孫勇 (五軍營)

西官廳聽征總兵官 高秉元 (三千營)

神機營左哨坐營官 仲繼 (神機營)

五軍營坐營官

果勇營坐營 陶希臯 (左哨) 原任宣府總兵 雲冒 (右哨) 原任宣府遊擊 戴綸 (左掖)

原任江淮總兵 李俊 (右掖) 東官廳總兵 劉鼎 (中軍) 原任西官廳參將 趙卿 (圍子手營)

五軍營左哨坐營 葉繼文 (幼官舍人營)

五軍營參將

東官廳右哨參將 歐陽安 (左哨) 原任固原遊擊 蕭鎮 (左哨) 東官廳後哨參將 吳尙賢 (右哨)

原任協同寧夏廣武營 黃恩 (右哨) 原任大同遊擊 魏民 (左掖) 原任大同參將 麻隆 (左掖)

原任甘肅遊擊 趙應 (右掖) 三千營坐司 劉秉忠 (右掖) 西官廳左哨參將 趙承懋 (中軍)

敢勇營 許策 (中軍)

そしてこのような人事が行なわれる裏面においては、太監高忠以下の内臣、および提督團營の成國公朱希忠・遂安伯陳鏞のほか、定國公徐延德・懷寧侯孫秉元・豐潤伯曹松・南寧伯毛重器・襄城伯李應龍・成山伯王維熊が各々營務を解かれていたのである。世爵から流官へという期待は、ここにおいて實現しているといえよう。

ところで、この大改革について、萬曆會典卷一三四、兵部、京營、營政通例の條には、

(嘉靖)二十九年。令革十二團營兩官廳。易交戎政廳。仍用印信關防。設京營總兵官提督三營一員。用協同提督官二員。贊理軍務文臣一員。舊任提督官回府管事。內侍官俱裁革。以兵部侍郎兼僉都御史。贊理京營軍務。領勅行事。

と敘しているが、また明史卷八九、兵志、京營の條には、

於是悉罷團營兩官廳。復三大營舊制。更三千曰神樞。罷提督監鎗等內臣。設武臣一。曰總督京營戎政。以威寧侯仇鸞爲之。文臣一。曰協理京營戎政。卽以邦瑞充之。…故事。五軍府皆開府給印主兵籍。而不與營操。營操官不給印。戎政之有府與印。自仇鸞始。

といっている。會典の記事は實錄、嘉靖二十九年九月乙未・丁酉・己亥の記事を取り纏めたものであるが、翌十月になると、京營提督の官名を「總督京營戎政」と改め、贊理文臣を「協理京營戎政」と改めたので、明史のような記述となったのである。とにかく嘉靖二十九年の改革では、まず內臣の提督・坐營・監槍官、勲臣の提督・坐營官をすべて追放したところに重要な意義があるが、さらにこの機會に五軍都督府とは別個に戎政府(戎政廳)なる新官署を設け、兵籍と營操を兼轄して軍事上の重要機構としたこと、そしてその長官である總督京營戎政には武臣をもって之に當てたが、次官である協理京營戎政には文臣をもって之に當てたことが注目される。總督京營戎政と協理京營戎政については日下舊聞卷一九に、三營共設總督京營戎政。公侯伯一人。協理。文臣一人。嘉靖二十年添設兵部尙書一員專督。二十九年改設侍郎一員協理。萬曆九年裁革。十一年復設。或尙書或侍郎或都御史任。櫟菴小乘とあり、總督京營戎政には公侯伯をもって之に當て(嘉靖二十九年以後の京營において、勲臣に残された唯一最高のポストである)、協理京營戎政には兵部侍郎をもって之に當てたが、時には兵部尙書・都察院都御史の場合もあったのである。同書同卷にはまた、

(嘉靖二十九年)總督以勲臣。協理以少司馬。彈壓以臺省。李文節公集

ともある。總督が勳臣より任ぜられ、協理が兵部侍郎より任ぜられることは前出の記事と同様であるが、「彈壓するに臺省を以てす」という表現は、管見の及ぶ限りではこの記載以外にない。これは兵部尚書や都察院都御史も戎政府において營務に參與した場合のあることをいっただけのものではあるまいか。

さて、總督京營戎政の初代は威寧侯仇鸞である。彼の祖父仇鉞は一介の傭卒より身を起こして正徳中世侯に進んだ、いわば勳臣中の成り上り者であるが、仇鸞が總督京營のポストに納まったのは、アルタン侵入の際、彼が平虜大將軍として禦敵の第一線に立ち、國家的危機を切り抜けたというその実績が買われてのことである。しかしその後を繼いだ總督京營には彼ほどの辣腕家はいない。前表において見られるとおり、それはほとんど永樂功臣の子孫によって占められているのであるが、功臣中においても、洪武・永樂の功臣はやはり格式としては別格のようで、嘉靖二十九年以後にあっては、このような一種の形式主義が人事の上に作用したのではないかと考えられる。そしてこのような總督京營の下に、文臣の協理京營戎政があったことは、ここに最も注意すべきところである。すなわち今次の京營改革において最も重要な一點は、この協理京營戎政が大きな指導力をもって登場したことにあり、それを思わしめるものとして次のようなことがある。というのは、隆慶四年三月から九月にかけて試行された文武六提督制（三大營の各々に侯伯の提督と右都御史の提督を置くもの）の採用の理由で、一つには總督京營戎政の任に堪える者がなく、兵權が一人に握られたまま廢弛するのを防ぐこと、二つには勳臣の才識が淺薄で、文臣の力を藉りなければ營務を整飭し難いことが擧げられているのである。嘉靖二十九年以後における總督京營戎政と協理京營戎政の關係も、之によってある程度推測することができよう。

### (三) 文武官制と武舉の問題

以上、明代勳臣の地位を論じて内臣・文臣との關係にも及んだが、ここで改めて明朝に特徴的な文武官制の問題に言及しておこう。蓋し勳臣は武臣の最高位にあるもので、ある意味では明代武官制の問題を集中的に内包するものともいえる

からである。まず文武官制に言及した資料を左に掲げる。

(A) 臣按。唐人選武將。不但於武臣。而亦於文吏中求焉。今宜立爲定制。凡文吏能應武選者。優等擢用之。比其原資超三級。不如此則人不肯應。何則文吏少而重。武職多而輕故也。(大學衍義補卷一三〇、嚴武備、將帥之任中)

これは、武將を選ぶには武臣の中からばかりでなく、文吏の中からも選ぶべきだとするのである。また文吏は重く武職は軽いというのは、宋代以來の傳統的觀念であらう。

(B) 自三代而下。摺紳介甲。判爲二途者久矣。然綜理綱維。其事。武士未之能專也。故歷代握兵者。必皆文武兼資之才。…國朝建置之初。一切右武。如五軍都督官。高六部尙書一階。在外都司衛所。比布政司府州官亦然。…故國初委任權力。重在武臣。事無不濟。承平日久。無用武事。則其勢自有不可行者矣。今天下兵政不立。兵威不振。正坐此也。使當時謀國者爲善後之計。每都司衛所。正官俱設文職一員。佐貳仍用武職。除民事不預。凡軍中事。宜與布政使司及府州官會同行事。庶乎其可也。然律令有變亂成法之戒。誰得而議之。(菽園雜記卷三)

つまり、明初においては一切右武を旨とし、武臣を重んじたところから、その品階も文臣の相當官よりは一段高く規定したようなわけであるが、これは平和を回復した中期以後の国内情勢には即應しないもので、明代兵政の缺點がここにあることを指摘する。そして綱維を綜理するようなことは元來武臣の能くしないところであるから、今後の問題として、都司・衛所などの正官には文職をもって之に充てることが望ましいとするのである。

(C) 太祖以武定天下。故紀元洪武。武官自勳臣外。左右都督正一品。同知從一品。都督僉事正二品。即在外指揮千百戶。

遞至從六品而止。原無七八品。惟土官有從七品。亦不支俸。蓋制之隆重如此。今武臣體兒陵夷已極。遂成偏重。一日有事。文臣不得復貴倨以面孔向此曹。可慮可慮。(湧幢小品卷八、武臣品級)

これもやはり武臣の品階が(文臣の相當官に比して)高く、官僚體制中において武官が偏重された形となつてゐるところに問題があるとし、文臣の軍事に對する指導權が發揮しがたい缺點をここに求めている。



(D) 唐宋以來。文武分爲兩途。然其職官。內而樞密。外而闔帥州軍。猶文武參用。惟有明截然不相出入。文臣之督撫。雖與軍事。而專任節制。與兵士離而不屬。是故洩軍者不得計餉。計餉者不得洩軍。節制者不得操兵。操兵者不得節制。方自以犬牙交制。使其勢不可爲叛。(明夷待訪錄、兵制三)

すなわち、唐宋以來、文武を兩途に分けたが、なお文官が軍事に參與することがあった。ただ明ではこの事がなく、文臣の督撫は軍事に與るといっても、それはもっぱら節制に任じたものであり、節制する者は操兵するを得ず、操兵する者は節制するを得ず、節制と操兵の兩者を兼ねることはなかった。これは犬牙交々制して叛亂を防止する用意に出たものである。また近年、宮崎市定博士が發表された論考「洪武から永樂へ——初期明朝政權の性格——」(東洋史研究第二十七卷第四號)の中には次のような一節がある。

(I) 蒙古的な武官を尙び、文官を賤める風はその後長く明の朝廷に残っていたのであり、それは太祖の政策に由來し、太祖の政策は元朝を踏襲したものに外ならなかった。

(II) 通觀するに中國史上において文武官の地位がこのように顛倒した時代は、元代を除いて外にない。ということは、それが元代の影響によると解しなければ説明がつかぬことを物語る。

上記のような明代文武官制の特徴を念頭に置いて、嘉靖二十九年の京營改革を見るならば、おのずからその意義の重大なことが了解されよう。前述のように、京營に對する文臣の指導力は、嘉靖期に入つてしだいに強くなつたとはいへ、なお傳統的な地位を誇る勳臣を壓服するほどのものではなかった。實錄、嘉靖二十九年九月辛卯朔の條に見える王邦瑞の上言に、

夫軍之不足不精。已非一日。先年。尙書王瓊・毛伯溫・劉天和輩。嘗有意整飭之矣。然將領惡其害己。率從中沮撓。陰壞正議。而軍士又習驕惰厭紀律。輒亡匿渙散。或倡流言。清理未半。事復中止。影蔽至極。遂啓戎心。

とあるのはこの事を推察せしめる。したがって、アルタン侵入事件の直後、勳臣の坐營官が追放され、文臣の協理京營戎

政（節制と操練を掌る）が登場したことは、明朝の軍事體制において、文臣の指導權がさらに一段と高まったことを示す指標とも考えられよう。雍正硃批諭旨（雍正十二年十月十七日、四川巡撫鄂昌の奏摺に對する）中には、

將來武員勢。必咸被文職挾制。前明之風。復見於今日矣。

という語が見えるが、こうした情況は恐らく嘉靖中期より萬曆末期に至る間において最も顯著に見られたことと思う。

なお、勳臣坐營官の追放ということを考えるとき、これに關連して注意すべきは武舉の問題である。すなわち春明夢餘錄卷三〇、五軍都督府附記の條に、

天順八年開武舉。成化四年・弘治十七等年。各有參定條例。然所取甚少。初止取二名。七年至十五名三十餘名。及嘉靖後。非武舉不得陞調。於是。世胄擁爲虛器。而功臣之澤斬矣。

とあり、嘉靖以後は武舉出身者の昇進が盛んとなり、功臣（勳臣）のような世襲的身分の者は之によって打撃を受けたことが伺われる。よってしばらく明代武舉の成立過程を追ってみよう。天順八年に武舉の法を立てたことは實錄にも記載があるが、次の成化四年というのは實錄には見當たらない。次に右の本文にも、實錄にも見當たらないが、國朝典彙卷一四九、兵部、武舉武舉の條には、弘治六年に武舉を定めたことが見え、「每六年九月一次考試」とある。また右の本文中にある弘治十七年の參定條例については、實錄、同年十月壬午の條に、このとき三十五名の中式者があったこと、および「今後三年一次舉行」と定めたことが見える。次に國朝典彙の同卷同條には、

正德三年四月。肇開武舉。…今以爲例。

とあり、これは實錄には見當たらないが、但し翌五月甲辰の條には、

兵部奏。武舉中式安國等六十名。請依條格陞級用之。報可。仍令分往陝西三邊。聽鎮巡官。編之行伍。有警調用。使知地理練邊務。若謀勇過人。有功可錄者。擢用之。不得假托公私潛回鄉里。

と見え、中式の六十名を陝西三邊に分往せしめ、之を聽用したと記している。欽定續文獻通考卷一二三、兵考、兵制に

は、右の條において、「武舉之議。發於弘治時。至是乃備其制」と述べ、武舉が實質的にはこのときから開始されたようにいつている。明代の武舉は大凡右のような経過を辿って成立したので、弘治以前はほとんどいうに足らず、正徳より嘉靖に入つてようやく歴史的意義をもつようになったのである。實錄、嘉靖十九年二月己卯の條に、

給事中王夢弼言。國朝武科。本無定制。間嘗舉行。後以六年爲率。士之登進者。衆不過三十二人。寡或二十人。蓋取之不廣。故習者少也。自陞下定制。以三年一試。取或至五六十人。士皆踴躍思奮。

とあるのも之である。<sup>⑧</sup> 世爵より流官へという坐營官の交替も、こうした事情を背景として起こつたものではあるまいか。そして世爵より流官へ、あるいは「内臣—武臣」より「文臣—武臣」への權力交替は、明代初期ないし中期の軍事體制からの脱却であり、同時に科舉の原理の高揚として、明末政治社會に起こつた革新的風潮の一所産といつてよいであらう。

## あとがき

本稿は明史功臣世表の分析を通じて勳臣の職種・職能を解明し、その間、内臣・文臣との關係にも言及したが、とくに京營の坐營官が嘉靖二十八年の任命を最後に後を絶っている點を重視し、それがいかなる理由により、又いかなる意義をもつものであるかを追究した。それは要するに政治史的な考察に終始するものであったが、これとは別に社會經濟史的觀點から嘉靖・萬曆時代における勳臣の地位を論ずることも重要な一課題であらう。この間において勳臣（明朝において最も封建的な支配階級）の没落ということが考えられるからである。嘉靖二十九年における京營の改革においては、本來軍人である勳臣が、軍人として最も重要な地位から追放されたという軍事上の意味が最も重要であるが、それに伴つて起こつた經濟上の問題としては、勳臣がこれにより占役・買閒などの收奪源を失つたということがある。<sup>⑨</sup> なおこの前後において、勳臣の社會經濟的勢力が低下するようになった指標を他に求めるならば、まず所有田土の制限ということがあろう。

すなわち、嘉靖八年には勲戚の莊田が擴大するのを喰い止めるために積極的な方策がとられ、勲戚の田土をことごとく清查し、本房の子孫がすでに斷絶し傍枝が冒占しているようなものは三分の二を官に沒收した<sup>④</sup>。この嘉靖八年の調査の結果は、以後、功臣所有田土の基準額となったものである。越えて隆慶二年になると、勲臣は始封者（一世）より傳えて五世（玄孫）に至れば百頃（但し元勲の場合は二百頃）を限ることと定められ、また萬曆九年には戚臣も之に準じて、五世に至れば百頃を限ることとなった<sup>⑤</sup>。このほか、水陸の交通運輸業・倉庫業などを手廣く行なっていた翊國公郭勛が、嘉靖二十年、罪を得て詔獄に下されたことにも、當時、勲臣の行なっていた營利活動に對する制限を見る。湧幢小品卷八、閣臣勲臣の條に、

萬曆中葉。文淵閣失印復鑄。而閣權始日輕。南中魏公賜第。毀而復造。失太祖御筆甚多。而勲戚日就窘迫。至有投河死者。兩事關係。獨在閣臣勲臣已乎。

とあり、萬曆中葉に勲戚の窮乏が著しくなったというのは、上記のような諸事情が累積してのことであろう。

## 註

① 但し洪武朝においては「其追贈封爵。無世系可譜。別以五等爲次。具列於左」として別枠に記載した開國前の功臣を除き、永樂朝においては忠勇王金忠を除く。

② このほか特別な例として、雲南の鎮守總兵官は西平侯沐英（のち晟のとき黔國公に進む）の子孫の世襲であった（皇明詠化類編、功宗卷三六。西園聞見錄卷一〇〇、内臣上、孫仁疏）。

③ 武宗實錄卷一〇三、正德八年八月乙丑。

④ 世宗實錄卷五六二、嘉靖四十五年九月丁巳。明史卷二二五、

歐陽一敬傳。

⑤ 弇山堂別集卷六四、總督兩廣軍務年表に「梧州開設總府。居中調度兩廣。副總兵・參將而下悉聽節制。而兩廣巡撫復不設。仍統於總督。正德十一年。改總督爲提督。嘉靖四十五年。因廣東寇發。遙制不便。兵部題准。總督軍務。止撫廣西。於廣東另設巡撫。至隆慶四年。又改總督閩廣兼理糧餉巡撫廣東。於廣西另巡撫」とある。

⑥ 明史卷七六、職官志、總兵官。萬曆會典卷一二七、兵部、鎮戍。明史卷二二二、俞大猷傳・劉顯傳。明史彙列傳第九一、俞大猷。

⑦ アジア歴史事典「總督」・「巡撫」

⑧ 丁易『明代特務政治』二九二—三〇五頁。

⑨ なお、弇山堂別集卷六四、南京守備協同參贊大臣年表には、これよりも詳細な年表がある。

⑩ 明史卷七六、職官志、南京守備・南京五軍都督府。萬曆會典卷一五八、兵部、南京兵部。同卷二二七、五軍都督府・南京五軍都督府。西園聞見錄卷七八、兵部、任將、王廷相曰。

⑪ 丁易『明代特務政治』二九九頁。なお、西園聞見錄卷七八、兵部、任將、王廷相曰によれば、勳臣の南京守備は終身官であるため、独自の權威をもって管下の軍民を黨附（畏附）せしめるものがあることをいい、終身制をやめて三年ないし五年の交替制にすべしと説いている。それが果たして實行されたかどうかは明らかでないが、明史功臣世表の中には、懷寧侯孫世忠が隆慶四年、守備南京となり、萬曆元年、鎮湖廣となった例がある。

⑫ 明史卷九一、兵志、江防。國朝典彙卷一六一、兵部、江防。

⑬ 明史卷七六、職官志、京營。同卷八九、兵志、侍衛上直軍。欽定續文獻通考卷一二二、兵考、兵制。同卷一二六、兵考、禁衛兵。王圻續文獻通考卷一六一、兵考、禁衛兵。皇明世法錄卷四三、兵制、侍衛上直官軍・皇城守衛。春明夢餘錄卷三〇、五軍都督府。萬曆會典卷一四二、兵部、侍衛。同卷二二八、上十二衛。太宗實錄卷一六三、永樂十三年四月丁丑。宣宗實錄卷九九、宣德八年二月壬子。

⑭ 洪武二十一年の「領中軍都督府」は、都が南京にあった當時の五軍都督府であるというまでもない。仁宗即位してより正

統六年までの北京は行在といわれたので、仁宗即位の「領後府」や宣德十年の「領前府」・「領左府」、正統元年の「領中府」などは南京の五軍都督府であったかとも思われる。しばらく疑いを存しつつ五軍都督府の中に入れておいた。また「屢領軍府」・「屢典軍職」の類は、あるいは五軍都督府と關係がないかもしれないが、これも参考までに入れておいた。なお表現の曖昧なものについては、前後の事情を勘案して南北のいずれかに入れたので、多少の誤謬は免れないであろう。

⑮ 弇山堂別集卷五三、大都督府左右都督同知兼事表の前文に「大都督府因樞密院而改建之者也。樞密院之職。實古太尉司馬諸將軍。而其名則循唐宦官之舊。五季托肺腑。其權據宰相上。宋顯兵政。稍與宰相次。而號兩府。然皆搢紳大夫爲之。至元而用其國人與漢人之以武功顯者。第往往參互一二搢紳。以贊其募畫。至明興而截然武弁數矣」とあり。但し明會要卷四二、職官、五軍都督府には「天順中。楊善以禮部尙書改掌左軍都督府。成化中。王越以左都御史改掌前軍都督府」とあるから、明代の五軍都督府にも一二例外的に文臣を用いたことはあったわけである。

⑯ 春明夢餘錄卷三〇、五軍都督府。

⑰ 菽園雜記卷九には、成化二十一年現在で五府の正官の名を記しているが、それがごとく公侯伯であるところから見て、恐らく成化の頃にはすでにそのような體制が確立していたのであろう。但し例外もあり、名將周尙文は流官の都督でありながら後府の掌府事となっている（世宗實錄卷三四八、嘉靖二

十八年五月乙亥參照。

⑮ 皇明世法錄卷四三、兵制、京營重兵には「是三大營也。是外又有千二・圍子手・幼軍舍人・殫忠・効義之屬。悉附五軍營中。而都督府亦自名前後中左右五軍。治常行簿書而已。非特命不與營務」とあり。

⑯ 今言類編卷四、經武門、兵權に「景泰三<sub>申壬</sub>。于肅愍公謙。建議立圍營。揀三大營中壯健士卒圍練。就於三營六提督中。揀二人充提督圍營總兵官。即於五府中蒞事。文臣提督以兵部尙書」とあるのは、五府と京營の統屬關係が密接になったむしろ異例の場合であらう。

⑰ 京營における提督・坐營官の職は、勳臣のポストとして最も重要なものであった。そのことは歴代、提督圍營となつた者について、明史の傳を見るとよく分かる。成化・弘治の間の保國公朱永については、前後八偏將軍印。内總十二圍營。兼掌都督府。列侯勳名。無與比。（卷一七三）とあり、弘治・正徳の間の英國公張懋については、

性豪侈。又頗腹創軍士。屢爲言者所糾。祠公凡六十六年。握兵柄者四十年。尊寵爲勳臣冠。（卷一五四）

とあり、嘉靖前期の遼國公郭勛については、

自明興以來。勳臣不與政事。惟勛以挾恩寵擅朝權。恣爲姦惡致敗。（卷一三〇）

嵩欲示厚同列。且塞言者意。因以顯夏言短。乃請。凡有宣召。乞與成國公朱希忠・京山侯崔元及讀・壁偕入。如祖宗朝蹇・夏・三楊故事。帝不聽。然心益喜嵩。（卷三〇八）

と見えている。これは朱希忠が提督圍營となつて間もない時のことであり、提督圍營の地位の高かつたことを知ることが出来る。

⑱ 世宗實錄卷三八、嘉靖三十一年八月乙亥の條に「兵部以總督京營戎政員缺。請令會推且言。京營舊制。文武大臣俱用提督名銜。相制行事。以防臣下擅權亂政者。請復舊便」とあるのはこのことを思わせる。

⑲ 憲宗實錄卷四一、成化三年四月乙卯の條によれば、同年、十二圍營が立てられたときの坐營官は、平江伯陳銳を除き、他は都督・都督同知・都督僉事である。しかし恐らく時代の降るにつれ、勳臣の坐營は漸増の傾向にあったものと思われる。

⑳ 英宗實錄卷二三八、景泰五年二月壬辰。

㉑ 丁易「明代特務政治」二五六頁。

㉒ 『明代特務政治』二五五頁には「正統中添設提督坐營監鎗太監」（鳳洲雜編卷五）、「景泰中始有分坐十營或稱監鎗者」（孫承澤思陵典記卷四引將德環王錫襄奏疏）などの例を挙げ、明通鑑卷二九、天順八年四月の條には「是月。召郭登總神機營兵。命內官十二人坐營管操」とあり、憲宗實錄卷四一、成化三年四月乙卯の條には「設十二營坐營官。：每營仍令內官一員協同管操」とあり。

㉓ 孝宗實錄卷八、成化二十三年十二月己丑の條に「巡按直隸監

察御史曹璘上疏言十事。…一慣將領。謂。近年多用內臣。在京坐營。在外鎮守及分守守備監鎗。將領爲之掣肘。乞一切取回。慣選將領。責其成功。如有疎虞。嚴置干法」とあり。

②⑦ 國朝典彙卷一五〇、兵部、京營。陳洪謨。繼世紀開卷一（紀錄彙編卷九一所收）。

②⑧ 明史卷一六、武宗本紀。同卷八九、兵志、京營。王圻、續文獻通考卷一六一、兵考、兵制、京兵。鳳洲雜編卷五。なお、英國公張懋は正德十年、七十五歳で歿した。

②⑨ 明史卷一三〇、郭勛傳。

③⑩ 明史卷七四、職官志、宦官。萬曆會典卷二二六、兵部、鎮戍、將領。萬曆野獲編卷六、內監。これよりのち、隆慶・萬曆兩朝においては鎮守太監の設置が甚だ少なかったが、天啓の時にはまた完全に恢復して設置され、崇禎の初めには一度罷免されたが、久しからずしてまた各邊に徧ねく設置された（『明代特務政治』二九六―二九八頁參照）。

③⑪ 憲宗實錄卷二五、成化二年正月戊申の條に「況今之爲將帥者。雖日用勳戚取人望。然未見其身任安危忘家徇國爲陛下治兵者。安能固內禦外而備不虞哉」とあり。

③⑫ 皇明世法錄卷四四、兵制、選用將材に「臣觀京營中。舉以備主帥者。大率皆公侯伯。夫封爵以報前功。豈必子孫皆可用也。宜勅天下。今後勿拘流品。山林之人。有足知曉兵習占候。悉傳致京師。隨材錄用。其有才堪大帥者。則縣官以禮聘之。擢總京營。或專大鎮。迨有成功。賞及學者。從之」とあり。

③⑬ なお、西園聞見錄卷六三、兵部、京營の陳時明曰も同趣旨で

ある。

③⑭ 世宗實錄卷八三、嘉靖六年十二月丁卯。

③⑮ 明史卷一二二、七卿年表二。なお、年表によれば李承勛は嘉靖七年三月、京營兵部尙書をもって都察院を兼管したことになるが、實錄にはこのことは見えない。

③⑯ 世宗實錄卷三六四、嘉靖二十九年八月辛巳。

③⑰ 世宗實錄卷三六四、嘉靖二十九年八月癸未。

③⑱ 明史卷八九、兵志、京營。

③⑲ 世宗實錄卷三六五、嘉靖二十九年九月辛卯朔。皇明世法錄卷四三、兵制、京營重兵。

④① 世宗實錄卷三六五、嘉靖二十九年九月丁酉。

④② 仇鸞の人事のみは最初に行なわれた。世宗實錄卷三六五、嘉靖二十九年九月乙未參照。

④③ 王邦瑞より仲繼に至るまでの人事は、世宗實錄卷三六五、嘉靖二十九年九月己亥參照。

④④ 陶希臯より許策に至るまでの人事は、世宗實錄卷三六五、嘉靖二十九年九月庚戌參照。こうした人事は威寧侯仇鸞の意向によるところが多いようである（同卷三八九、三十一年九月庚寅）。なお、これとともに、仇鸞は京營の兵を強化するため、遼東・宣府・大同・保定・延綏・固原・寧夏・甘肅などの邊鎮より六萬八千餘人の邊軍を班上せしめ、京營の兵とともに雜練した。

④⑤ 世宗實錄卷三六五、嘉靖二十九年九月辛卯朔。皇明世法錄卷四三、兵制、京營重兵。

④⑤ 世宗實錄卷三六五、嘉靖二十九年九月癸卯。

④⑥ 世宗實錄卷三六六、嘉靖二十九年十月辛酉朔。萬曆會典卷一三四、兵部、京營。

④⑦ その位置は東華門の東北にあつた。皇明世法錄卷四四、兵制、戎政事宜參照。

④⑧ 實錄によれば、兵部尙書で協理京營戎政となつた者として、たとえば史道（嘉靖三十年八月乙酉）・江東（嘉靖四十一年正月庚戌）・楊兆（萬曆八年十月辛丑）・李化龍（萬曆三十六年十一月癸卯）・黃克纘（萬曆四十七年十二月壬子・天啓二年正月壬戌）・馮嘉會（天啓六年七月辛巳）などの例がある。都御史で協理京營戎政となつた者の例は未だ檢索し得ない。兵部侍郎または兵部尙書が食都御史を兼ねて協理京營戎政となつた例はしばしば見えるので、都御史というのはこうした兼銜ではないかとも考えられる。

④⑨ 明史卷一七五、仇鉞傳。

⑤⑩ 世宗實錄卷三六四、嘉靖二十九年八月壬午。

⑤⑪ 萬曆野獲編卷五、勳戚、爵主兵主に「凡公侯伯家。最尊嫡長。其承襲世封者。舉宗呼爲爵主。一切吉凶大事。以及爭鬭構鬪。皆聽爵主分割曲直。其罪稍輕。不必送法司者。得自行答禁。不避尊行。亦猶天家親藩及郡王體制。最合古人宗法。然惟開國靖難諸故家爲然。其他暴貴者。不能盡聽約束矣」とあるのはこのことを思わせる。

⑤⑫ 穆宗實錄卷四三、隆慶四年三月壬午。同卷四九、同年九月甲午。明史卷八九、兵志、京營。國朝典彙卷一五〇、兵部、京

營。王圻、續文獻通考卷一六一、兵考、兵制、京兵。欽定續文獻通考卷一二三、兵考、兵制。

⑤⑬ 穆宗實錄卷四一、隆慶四年正月己卯。春明夢餘錄卷三一、戎政府。欽定續文獻通考卷一二三、兵考、兵制。

⑤⑭ 國朝典彙卷一五〇、兵部、京營、隆慶四年二月、吳繼爵等奏言。

⑤⑮ もっとも、西園聞見錄卷六三、兵部、京營には「吳時來曰」督理大臣。雖有專任。未幾輒有遷轉。上懷苟且。下懷觀望。此速轉之弊也」とあり、文臣の轉任が頻繁であつたことはそのマインス面である。なお、嘉靖二十九年以後の京營において、諸般の事情が著しく改善されたという形跡はない（西園聞見錄卷六三、兵部、京營參照）。

⑤⑯ 天啓・崇禎朝においては、また内臣が營務を領導するようになったし（明史卷八九、兵志、京營。欽定續文獻通考卷一二二、兵考、兵制。春明夢餘錄卷三一、戎政府、京營事例、内臣參照）、崇禎朝においては、文臣が抑制されたようである（明夷待訪錄、兵制二・三參照）。

⑤⑰ 憲宗實錄卷一〇、天順八年十月甲辰。

⑤⑱ 但し憲宗實錄卷一七八、成化十四年五月己卯の條には、太監汪直が、武舉を鄉試・會試・殿試の三層制にしようと奏請し、兵部尙書朱俊等がその科條の大略を議上したが、大學士萬安が計を設け内批により實施を見送らせたということを載せている。四年と十四年との相違はあるが、念のため書き添えておく。



⑤③ 世宗實錄卷二五三、嘉靖二十年九月丁未の條には、毎科五十人（邊方三十、内地二十）を取ることにしている。

⑤④ 占役・買間の弊はその由來するところが古く、すでに正統・景泰年間よりその例があり、青山氏の論考に詳らかであるが、その後においてもますます盛んに行なわれたもので、たとえば實錄、成化二年正月戊申、監察御史魏瀚等の上言には「今、京師軍士。不下三十餘萬。間或占役于私家。或借工于公府。或買閒而輸月錢。或隨從而備使令。其操練者。大率多老弱不勝甲冑者也」とあり、この種の記載は史料に疊見するところである。

⑤⑤ 世宗實錄卷一〇〇、嘉靖八年四月甲戌。萬曆會典卷一七、戶部、田土、凡詭寄投獻等禁例。

⑤⑥ 世宗實錄卷三五三、嘉靖二十八年十月辛丑。

⑤⑦ 萬曆會典卷一七、戶部、給賜。なお、勲戚の莊田の所有制限については、清水泰次「明代莊田考」（東洋學報第十六卷第三・四號、明代土地制度史研究所收）参照。

⑤⑧ 世宗實錄卷二五三、嘉靖二十年九月乙未。

## 東洋史研究叢刊之十二之二

### 中國征服王朝の研究 中

田村實造 著

A5判 本文六五五頁  
定價 四千五百圓

本書（中巻）は中國征服王朝のうち金・元兩朝に關する研究であるが、遼朝史の研究を主とした上巻とは、その内容のしくみをかえて通史篇と研究篇とに分つことにした。前半の通史篇では金朝史・元朝史を通論し、後半の研究篇には金元兩朝の特殊研究八篇を収めた。

#### 内 容

#### 通 史 篇

金 朝 通 史 元 朝 通 史

#### 研 究 篇

海陵王の遷都に關する一考察 大金得勝陀頌碑の研究 モンゴル族の始祖説話と移住の問題 チンギス・カーンの札撒 アリクブカの亂と海都の叛亂 世祖の政治制度 世祖の財政經濟策 元末の叛亂とその性格 中國征服王朝について

右書御希望の方は本會まで御申込み下さい

京都市左京區吉田本町 京大文學部内

東 洋 史 研 究 會

振替京都 三七二八番